
Kamen Rider DECADE～分岐されし未来～

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K a m e n R i d e r D E C A D E 〔分岐されし未来〕

【Nコード】

N 7 4 2 9 M

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

それはこれまでにない、衝撃的な【最終回】だった。

この作品は、冬映画とは違う：“最終回後の予告”を元に作られた、ディケイド二次創作。所詮二次創作なので、作者が勝手に補完した部分やオリジナル設定も入り混じります。この物語が、ハッピーエンドで終わるのか。バッドエンドで終わるのか。

それは、世界が無数にあるように：そこに無数に存在する人間一人ひとりの解釈で結構です。

前編

——銃声が響く——

「ディケイドー!!」

声が、聞こえる。

その瞬間、その体は揺らぎ、立っていたのは銃を構えたシアン色のライダー…

ディエンドだった。

凶弾に倒れたマゼンタのライダー…ディケイドを見ながら、光夏海はディエンドに言い放った。

「……大樹さん…どうして! どうして士君を…」

「…」

「大樹さん!」

「悪いね、ナツメロン。ディケイドが破壊を失敗した時から、こうする定めだったんだ」

「大樹さんまで…どうしてそんなことを言うんですか!? 士君は破

壊者ではありません、士君は！」

「———どういことですか、ディエンド」

仮面ライダーキバ：紅渡が、ディエンドに尋ねた。

ディエンドは少し間を開けつつも、「さあ？」というように手を広げた。

「『どういこと』とは、どういことかな」

「約束が違う。あなたには、ディエンドライバーとライダーカードを報酬に：ディケイドが失敗した時の【巻き戻し】を頼んでいたはずだ」

「まさかとは思うけど、：倒したのですか？」

「そうなのかい？ 青年」

仮面ライダーアギト：津上翔一、仮面ライダー響鬼：日高仁志^{ヒビキ}もディエンドに尋ねる。

しかし：

それは想定外だ、とばかりにブレイドKF：剣崎一真、ファイズ：乾巧、カブト：天道総司もディエンドに詰め寄った。

「待て。本当にディケイドを倒したというのなら、今頃は消滅しているはずだ」

「だけど、あいつの体は残っている…」

「どう考えてもおかしいな。ディエンド、貴様：何を考えている？」

「———悪いけど、ここでお別れだ」

『Attack Ride INBISIVLE!』

ディエンドはそう言うと、ディエンドライバーにカードを装填する。そしてそのまま姿を消したかと思うと、別の銃声が聞こえる：キバ達が振り返ると、そこにいたはずのディケイドの肉体も無くなっていたのだ。

それを見たファイズは叫び、響鬼は腕を組む。

「くそっ！　どういことだ！？」

「逃げられた：みたいだなあ」

「……恐らくディエンドは、一時的にディケイドを気絶させたのでしよう。：だが、一体何故」

「——だから、【システム・ディケイド計画】は装着者を倒してから、新しく見直すべきだと言ったんだ！」

考え込むキバに、ブレイドKFが言い放つ。

ファイズやカブトも、頷く：

しかしキバや響鬼、アギトはそんな彼らを見据え、電王：野上良太郎も、意見を告げていた。

「確かに。さっさとディケイドを倒して、新しく計画を練り直せばこんな面倒くさいことにはならなかったはずだ」

「：おばあちゃんは言っていた。チャンスは一度きり、判断を間違えると痛い目を見るとな」

「ですがディケイドを倒したとして、新しいディケイドライバーを作るのには時間がかかります」

「アレは装着者と一蓮托生：みたいな厄介なシステムを付けられたからねえ」

「大ショッカーが介入しなければ、もっとよかったですけどね」

「だけど、……剣崎さん達の方法だとディケイド：門矢さんは死んでしまう。：流石にそれは、駄目だと思います……」

彼らの話の内容が飲み込めない夏海。

しかし、どうやら紅渡達ライダーは…現在『紅渡派』と『剣崎一真派』に分かれているらしい。

だが、双方の話を纏めると――

一方は、ディケイドは9つの世界のライダーを破壊をしなければいけないかった。

一方は、早いうちにディケイドを破壊して新しくディケイドを作り出すべきだった。

見事に意見が食い違っているのだ。

何が本当か夏海が困惑していると、急に彼女の手を引く者がいた…アルティメットクウガ、…ユウスケだ。

「ユ、ユウスケ？」

「夏海ちゃん。今のうちに離れるんだ」

おかしい。

ユウスケはさっき、死んだ。

そしてキバ―ラに噛まれ、息を吹き返したかと思えば…ディケイド、つまり士の敵になったのだ。

それがどうしていきなり…

そう思っていると、先程から沈黙していた仮面ライダー龍騎…城戸真司が、UMクウガに叫んでいた。

「――ッ、待て！その子をどうする気だ！？」

「え？」

「……ふんッ！」

UMクウガは龍騎に手を突き出すと、突然龍騎の体が発火する。
…人体発火…
アルティメットが使える力であり、直接手を触れずとも敵を倒せる力。

突然の事態にアギトが、電王が、龍騎に駆け寄った。

「——っぐあああああっ!?!」

「「城戸さん!」」

「逃げるぞ!」

「ユウスケ!?! でも…」

「早く!」

UMクウガは夏海の手を引きながら、逃げ出す。

夏海は彼に手を引かれつつも、肉体を焼かれている龍騎を見ていた…
アギトや電王は消火作業をしようとするが、中から焼けているため、簡単には消えない。

「あいつらはどうせ、記憶の存在だ。……体を保つ肉体的データが消えるだけで、死にはしない」

「…ユウスケ…? どうして、そんなことを」

「いいから!」

もう、何が何だか分からない。

——士はライダーを破壊するべきだったと言われ。

——海東はいつも以上に奇怪な行動をし。

——ユウスケは一度死んだはずなのに、生き返っていた…
何を信じればいいのか夏海には分からずにいた。

だが

今はただ

自分の手を引く相手に縋るように

走り続けていた

〃
〃
〃

渡達のいる場所から、遠く離れた廃屋。
そこで、門矢士は眼を覚ました。

「う……ぐ」

「目覚めはどうだい？士」

「海東！お前、よくも……ッ」

ズキ、と体が痛むのを感じる。

苦痛に顔を歪ませる士をよそに、海東は、笑みを見せながら1枚のカードを取り出した。

『ANESTHESIA』

見たこともない、カードだった。

「なんだ、それは…」

「一回の周期につき1度しか使えない特殊なカード、『ANESTHESIA』…麻酔弾のようなものだと思ってくれたまえ」

「ちょっと待て…【周期】ってどういうことなんだ？…つか、この痛みはいつまで続く。いつもの『痛みは一瞬だ』はどうした」

「悪いね。そのカードは打った人間をあたかも死んだかのように見せかける、つまり、一時的に仮死状態にさせるんだ。…ああ、消えちゃった」

海東の持っていたカードが、消滅する。

一度しか使えない、というのは本当のようだ。

だがそれ以上に士は、知りたいことがある。

…海東は士がもう一度言う前に、説明をしていた。

「で、さっきの【周期】の話だけど。——ディケイドが破壊を失敗して、それを僕がリセットする、それが周期の基準さ」

「なんだって？」

「君は知らないだろうけど、君の旅は元々道筋が定められていて、その通りにライダーを破壊し、世界を救わなければいけなかった。だけど、君はいつも【クウガの世界】で小野寺君を破壊できず、結果的に道筋が狂って何度も僕がリセットしていた」

「…おい、ちゃんと手順を立てて話せ。大体分からん…」

痛みが続いているのか——しかし、先程に比べると少し軽かった——、士は再び顔を歪ませる。

海東はディエンドライバーをくるくると回しながら、答える。

「いいだろう。それに、僕がこの周期でリセットせず君を生かした理由を教えなくちゃいけないからね」

海東は、手始めにディエンドカードを置いた。

海東曰く、「説明をするには1枚足りなかったから仕方なく」だそうだ。

「世界はね、元々一つだったんだ」

「…なんだって？」

「といっても、今僕達がいる世界と…9つの世界の話なんだけどね。とにかく、元々一つだった世界は…ある日突然、十つの世界に分けられた」

海東はディエンドのカードを囲むように、クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバと…9人ライダーのカードで正円を作るように並べる。

「まあ、この中心にある世界が“親”で…その中心を回るように存在している世界は、“子”みたいなものさ」

「……」

「そしていつしか怪人のいない世界に怪人が現れ、それに応じて…ライダーが生まれた。そしてその時から、歪みは生じてしまった」

「それと世界の融合と、どう関係がある」

「大ありさ。独自の世界を築こうとしていた9つの世界は、この中心にある世界に引き寄せられていった」

少しずつ、クウガやアギトなどのカードを中央に近づける。

そこで、「ちょっと待て」と士から静止が入った。

「どうしていきなり、別れたはずの世界がまた引き寄せられていったんだ？」

「簡単なこと。独自の世界を築こうとしたけれど、“1つの世界”として確立してはいなかった。そのために、親である10つ目の世界に引き寄せられる形でもう一度融合を開始したんだ。【確立した世界】になるためにね」

そこで、と海東は別のカードを取り出す。

説明には駒が足りなかったのか、今度はアーク・ギャレン・カイザ・G3・コーカサス・斬鬼・ゼロノス・王蛇・リュウガを使う。

「それぞれの世界を管理するために生まれた管理者達は、どうするべきか考えた」

「…王蛇やリュウガが、か？」

「物の例えだよ、た・と・え。……とにかく、管理者達は【世界を見守る程度】の存在……どれだけ力を持っていたとしても、どの世界にも直接的な干渉はできない。ただ、助言を与える程度のことしかできないんだ」

「…」

「そこで、リーダーである男は……10つ目の世界にいた研究者達に、内密に頼んでいた——世界崩壊を救うための唯一の手段とされた、【システム・ディケイド】を行うために」

聞き慣れた名前に、士は眼を見開く。

そんな事などお構いなしに、海東は別のカードを並べた。

それはファムと、BLACK。

最初、ファムとBLACKの距離は離れていたが、海東はアークと

一緒にそれをファムのもとに動かした。

「【システム・ディケイド】は、管理者の一人…紅渡と、破壊された未来の世界の住人である鳴滝、そして10つ目の世界の研究者であった木野桜子によって行われた」

「しかし彼らだけでは、【システム・ディケイド】の複雑な設計は図面すら作れなかった。もっと、技術のある研究者の協力が必要だった」

「——そこで、木野桜子は…君もよく知っている、大ショッカーの研究者…結城丈二を説得に出たのさ」

知っている名前がいくつも出てきたことに、士は混乱する。

とにかく、分かったのは紅渡と鳴滝は仲間だった。

…しかし…

どうも鳴滝は、【自分を破壊するため】に行動していたにすぎない。つまりはディケイドを排除しようとしていた。

そんな彼がどうして【システム・ディケイド】に加担したのか。

そう思っていると、海東はライダーマンのカードを追加していた。

「結城丈二は最初、申し出を断っていた。しかし、木野桜子の懸命な説得と…未来の世界から来たという鳴滝の言葉を信じ、大ショッカーを裏切る決意をした」

「そうだったのか…、…ん？」

「結城丈二の協力あってか、ディケイドライダーは完成に近付いていた。設計図も完成し、これからディケイドライダー並びにディエンドライダーを作り、【システム・ディケイド】を行うはずだった

……土。君が大ショッカーを率いて、攻め込むまではね」
「!?!」

~~~~~

紅渡達は、管理者しか存在できない【場所】に戻っていた。

この場に一人残り、状況を見ていた男：五代雄介に話を聞くためだ。

「――五代さん。世界の様子は…」

「渡。……酷いものだ、どの世界も、融合し…消滅した」

「当然でしょうが、…9つの世界に生き残りは…」

「その確認はまだだ。だけど、……いないと考えていたほうがいいかもしれない」

くそっ、と乾巧が叫ぶ。

「最悪だろ…ディケイドがライダーを破壊しなかっただけじゃない！ディエンドが、ディケイドを倒すことはおろか…リセットすら放棄した!?!」

「確かに。このようなことは、今までに一度もなかった」

「不測の事態、ということですか？」

「だと、思います…」

「こうなってくると、俺達もお手上げだね。……城戸君も、肉体データ飛んじやったみたいだし」

天道総司や津上翔一、野上良太郎にヒビキが口々に言う。

——あの後、城戸真司は体を構成していた肉体データが破壊されてしまい、存在を保てなくなっていた。

しかし、その【存在】とはあくまで肉体的な意味で：死んではないない。

剣崎一真はふいつと踵を返し、何処かに行こうとした……だが、それを紅渡が制止する。

「剣崎さん。何処へ行く気ですか」

「…ディケイドを破壊する」

「無駄ですよ。今更破壊したところで、世界は救われない。……あなたも分かっているはずですよ」

「……そうだとしても、奴の行動は許しておけない。…俺達を裏切った、“奴”は…」

剣崎は、静かに立ち去っていく。

その後をついていくように、乾巧や天道総司も歩き出していた。

津上翔一は叫ぶが、二人は振り返らない。

「乾さん！天道さん！！」

「…悪いが、俺は剣崎に賛成だ」

「ディケイドは混沌の原因だ、…奴とは戦う宿命だったにすぎない」  
「ですが！ディケイドを倒せば、乾さん達も消えるんですよ！？」

津上翔一の言葉は、正論だった。

彼らは、現実とはかけ離れた存在…

直接的な干渉は禁じられており、できても、言葉で他者とコンタクトを取る程度だった。

そんな彼らが、万が一ライダーを…ディケイドを倒せば……干渉制限を破った罪で、存在そのものが抹消されてしまう。それが、管理者として生まれた宿命だった。

「……俺達のしようとしていることは、罪の上に成り立つ罪だ。だがな、……例えそうであっても俺達は戦う」

「汚れ役、という言い方は好かないが…そうなるだろうな。お前達は、ディケイドが破壊された場合のことも考えておけ」

「…乾さん、天道さん…」

歩き出す二人を、津上翔一は…これ以上止められなかった。眉を下げながらも、ヒビキは紅渡に意見する。

「…どうする、渡？」

「仕方ありません。……ディケイドとディエンド、二人に事情を話し…剣崎さん達よりも先にリセットを行いましょう」

「ま、そうなるだろうねえ」

「それと…五代さん。すみませんが、津上さんや良太郎君と一緒に小野寺ユウスケ並びに光夏海を探してください」

紅渡からの申し出に、五代雄介は驚いていた。

まさか、二人を人質に？

紅渡の性格からしてそれはないと思いつつ、五代は念のために、訪ねた。

「…二人をどうするんだ？」

「光夏海を保護してください。ただ、小野寺ユウスケ…彼の行動だけが、未だ気になる。しかも殆どの世界が破壊された中、彼だけ生

きていることが……不可解で」

「分かった。だけど、例え戦いになったとしても力は使わない……ただ、二人に話をするだけだ」

「いいでしょう。———お願いします」

しかし……

野上良太郎は、先程からせわしなく周囲を見回していた。一体どうしたのか？

彼の奇怪な行動に首を傾げたヒビキは、訪ねる。

「どうしたんだい？」

「ヒビキさん。……その、さっきから城戸さんの気配が……感じられなくて」

「ええ？……あ、本当だ」

「肉体飛んじやってますから、俺達についてきてくれたかどうかも変わりませんしねえ」

ヒビキと津上翔一は、やっと気付いたかのように手を叩く。

確かに城戸は、肉体が消滅した。

だが、その気配は管理者である彼らには薄々と感じられる……それなのに、今はそれが感じられない。

五代雄介は困り顔をしながら、紅渡に忠告していた。

「渡。……城戸が前から言っているように、“ディケイドも犠牲にならない”方法や……“9つのライダー達を消さなくても済む”方法も、探せばあったんじゃないか？」

「……根拠のないことに、労力を注いでいる暇はどこにもなかったはずです」



「それはそうだろうけど…」  
「とにかく、……城戸さんもついでに探してください。今の状態で何かあれば、……完全に消滅しますよ」

〃  
〃  
〃

「大シヨツカーは結城丈二の裏切りを知った。そして、結城丈二を大シヨツカーに連れ帰り……その上で自分達の邪魔となる【システム・デイクイド】を阻止するために研究所を襲った。そして、その時の指揮官が……君だった」

海東は、ライオトルーパーとタイガのカードを追加する。

恐らくタイガが“士”を意味しているのだろう。

……流石に別のライダーを使われては、と思った士は自分からデイクイドのカードを海東に貸した。

「……俺の説明は、これでやれ」

「ありがとう。じゃあ、タイガを戻してっと——その時研究所には、紅渡はいなかった。まあ、いたとしても直接戦うことができないからどうにもならなかっただろうけど」

「……待て。戦えないなら、どうしてさっき俺と戦おうとした？」

「それは、毎回やっている演技。無意味だろうけど、君の目的を再

確認させるための…ね」

海東の話によれば、リセットをすることにその時の旅の記憶もなくなる。

だが、士には怪人やライダーの情報が残り、海東は殆どの記憶を継承できる代わりに古い記憶から薄れていくのがドライバーの仕様。夏海が頻繁に見ていた夢も、これまでにループしてきた世界の“最期の光景”が混在した結果のものだったそうだ…そしてそれは、旅の終焉が近づいた時に現実的なものになっていく。

だから紅渡の行動は無意味に近いのだが、裏を返せば、『ライダーを破壊する』という使命を体の中に植え付けるための行動。

「話を元に戻して…大ショッカーの襲撃により、ディケイドライダー並びにディエンドライダーの設計図は奪われた。そして、命の日が尽きる寸前までそれを守ろうとしていた…木野桜子の命も」  
「…そして、大ショッカーはドライバーを作り…結城丈二は裏切り者として処刑された、か？」

「その通り。だけど、あいつらのミスは…設計図通りに作ってしまったこと。だからこそ、多少強引ではあったものの…【システム・ディケイド】を予定通り行うことにしたんだ」

海東は、士にディケイドライダーを要求する。

士は仕方なくそれを貸し、海東もディエンドライダーを出した。

「ディケイドライダーは、大ショッカーの首領であった君だけが使えるように仕様を変更した。だからこそ、紅渡は君の【大ショッカー首領】としての記憶を封じ込め、世界の破壊者・ディケイドとして送り出すことにした。その際使ったのが、あの光写真館」

「……」

「君は知らないだろうけど、あの写真館には“世界を廻るための機

能”が建物全体に備わっていた。そして君は予定通り、仮面ライダーを破壊し：彼らを一旦【情報化】する必要があった」

「情報：化？」

コクリ、と海東は頷く。

「デイクイドライバーには、倒したライダーを一時的にカードとして情報化し、情報を復元させる力があった」

「なん：え？」

「9つの世界の融合を阻止するには、世界がそれぞれ【確立した世界】にならなくてはいけない。それが紅渡の考えだった。……それを可能にするには、その世界の核となるライダーを情報化して、デイクイドライバー内の復元機能で1つ1つの世界が当たり前のよう  
に存在できるようにする：すなわち、正常な情報に書き直すのさ」

士は頭の中で、話を纏める。

海東の言うことが本当ならば、デイクイドの破壊＝9つの世界を融合から救う手段だった。

となると、本当に自分のしてきたことは間違いだったのか：士はそう後悔していたが、海東は話を続ける。

「だとしたら、俺は：」

「そう、破壊しないといけなかった。それも、正：：：正しい順番でね」

「正しい、順番？」

「9つの世界は、中心の世界よりかなり不安定：だからこそ、【システム・デイクイド】では一番不安定な順から修復を行うべく、旅の道筋が決められていた。こういう風にね」

そう言いながら、海東はクウガを指刺し、そこから順に時計周りに動かす。

その順番に、士はようやく思い出した。

——ケータツチの、起動順だ。

「だけど、ここでいつも失敗して…結果的に狂った順番で世界を巡り、融合化を免れなくなる……ってなるんだよ」

「どういうことだ？」

「さっきも言ったとおり、不安定さは世界ごとに違う。一番不安定な世界が後回しになったり、多少安定している世界を先に修復したりすると、バランスが取れなくなる。こうなると、後から破壊したとしてもドボン…まあそうなっている原因は、鳴滝とナツメロンにあるわけだけど」

「夏海が？」

「彼女は、どのループにおいても【クウガの世界】で君の破壊を止めてきていた。——剣崎一真はいつそのこと、ナツメロンを排除したほうがスムーズにいくのではないかと考えたみたいけど…城戸真司が煩くて、断念したみたいだよ」

海東の話だと、鳴滝の介入だけではなく、夏海が止めなければクウガは予定通り情報化され、その後も正しい順番で世界を巡って…それでよかった。

士を破壊者にしてはいけない…

そんな彼女の想いとは裏腹に、彼女自身が融合化阻止の邪魔をしていた。

なんとも、皮肉な話だ。

「…その城戸は、なぜ夏海を庇ったんだ？」

「ナツメロンだけじゃない。最初から、【システム・ディケイド】

によるライダーの破壊にしろ…剣崎一真らによる君の排除にしろ…  
…反対していたみたいだったよ」

「……それで、さっきから話に出ているリセット…は？」

「ディエンドライダーには、【時間を巻き戻す】システムと【ディケイドを倒す】システムが実装されていた。どちらも、“破壊が失敗した場合”時のみにできるけどね」

【システム・ディケイド】が失敗した際、額のポインター部分を銃弾で打ち抜くことでディケイドライダーの機能をリセットさせ、その際ディケイドライダー内にある情報を逆流させ“夏海の世界が崩壊する少し前”までループさせるのが前者。

また、逆にディケイドのバツクル中央部分を打ち抜けばディケイドライダーの機能を完全停止させ、更には使用者の活動をも停止させる力があるのが後者。

海東は紅渡との事前契約で、前者をすることになっていた。

——だが…彼はそれに背き、あえて“ディケイドを逃がした”

「待て、そうなる…お前は」

「間違いなく命を狙われるだろうね。だけど、彼らを裏切ってまで助ける理由はちゃんとある」

「…仲間、だからか？」

「それもある。だけど、士…今回君が廻った道筋を、君の持っているカードで表してくれ」

海東に言われるがままに、士は9枚のカードを並べる。

クウガ・キバ・龍騎・ブレイド・ファイズ・アギト・電王・カブト・響鬼…

そして海東も、説明に使っていたカードを本来巡る順番で並べていた。

クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバ：

「共通点、分かるかい？」

「…そんなの知るか…ん？」

「気付いたみたいだね。——士、鳴滝は確か…別の世界の怪人を、その怪人が存在してはいけない世界に呼び寄せたらしいね？」

「あ…龍騎の世界の順番が、巡る順番と同じ…！？」

「正解。——本来、一度順番が狂ったら…二度と本来巡る順番と同じにならない。が、鳴滝は君を倒すためにミスを犯した…それは、カテゴリKのパラドキサアンデッドの能力を図るべく、【龍騎の世界】を実験対象に選んだこと。これは幾度となく繰り返されてきたループにおいて、初めてのことだった」

そんなことまで知っていたのか、と士は驚きを通り越して呆れていた。

むしろ【龍騎の世界】の地点で教えろよ、と思ってもいたが…

海東は気にせず、説明を続行した。

「決められた動きをする歯車が、一つでも狂ったら…どうなると思う？」

「聞かれなくても分かる。そこから動きが悪くなるんだろう？」

「ああ。そしてそれが原因で、決められた結末も大きく歪むことだってあるわけだ。…それが例え、結果的にいい結末になることだとしてもね」

「…」

「さて、ここからが本題だ。僕だって策もなしに、君を助けたりはしていない。…今まで僕の話聞いてきて、分かったことは何だい？士」

初めて聞くようなことを、一気に教えられたせいか……  
士はやはり、まだ混乱していた。  
しかし、彼も何をするべきかようやく見えてきたようだ……

「……元々、融合を防ぐためには……俺がライダーを破壊して、情報化し、確立した世界になるよう修復する筈だった。それが、【システム・ディケイド】」

「それで？」

「だが、それはもはや何回ループしたとして、叶わない理想。……現状でも既にライダーは全て消滅して、どうしようもない……それが現状なんだろう？」

「そうだ。だけど、そのどうしようもない現状を打開する方法が一つだけある」

「何!？」

海東の言葉に、士は飛びつくように叫ぶ。

そんな彼に、海東はその方法を教えようとした……

「——見つけたぞ」

しかし、それは剣崎一真らによって邪魔されてしまう。

それぞれ、変身アイテムを構える彼らを見ながら……士は言い放つ。

「いいのか? お前ら、本当は直接的な干渉は駄目なんじゃないのか」  
「愚問だな、ディケイド。……俺は既に、その覚悟を決めている。」

そしてそれが分かっている上で、乾も天道も：お前を倒そうとしている」

「ディケイド。悪魔。……俺達の手で、消してやる。——ディエンドもろともな！」

「お前を倒し、新しい【システム・ディケイド】を行う：行くぞ」

「上等だ。そんなに死にたければ……」

「——士！彼らを相手にしている時間はない、逃げるぞ！」

海東がカードやドライバーを回収し、士の手を引く。

いきなり逃げ出した彼らを、剣崎一真らは追いかける…

敵前逃亡など好かない士は、走りながら海東に文句を言っていた。

「おい！海東！！」

「僕が言い掛けた打開策、それには士。君が旅をしてきた記憶が必要なんだ！君をここで、倒すわけにはいかない」

「何…？どういうことだ、海東！」

「…遅い！」

高速の世界から追ってきたカブトが、士達の前に立ち塞がる。

そういえば、ファイズもカブトもそれぞれ“クロックアップ高速移動”と“アクセ高速移動形態”を持っている…

逃げる人間に追いつくなど、造作もないだろう。

「くそっ！？」

「盲点だったよ。そういえばファイズもカブトも、追いかけてこは得意だったね…」

「覚悟するんだな、ディケイド」



「おばあちゃんは言っていた。往生際の悪い人間は、それ相応の末路しかない」と

「…貴様は、ここで倒す」

剣崎も、ブレイドKFとなってゆっくりと歩いてくる。

この三人を相手に逃げ切る確立は、ゼロに等しいだろう…

海東はディエンドライバーを構えながら、何とかして士だけは無事に逃がそうとしていた。

「士。今から3カウントを取る…僕が3と言った瞬間に、ファイズの方に走って逃げるんだ」

「冗談じゃない。…お前には聞きたいことが山のようにあるんだ、こんな所で勝手に死なせてたまるか」

「やれやれ、ここまで往生際が悪いと、いつそ同情するよ」

「お前もな」

互いに譲れない二人。

そうになると、変身し…協力してここを突破することが第一だと考えていた。

士も静かにディケイドライバーを構え、そして、準備をしていた…

そんな時だった。

『NASTY VENT』

「―――耳を塞げえっ!!」

音声と同時に、声が聞こえる。

それを聞いた士と海東は、素早く耳を塞いだ：

その瞬間、どこからともなく仮面ライダー・ナイトの契約モンスター『ダークウイング』が飛び回りながら超音波攻撃を仕掛けてくる。耳にはつきりと聞こえてくる不快音に、ブレイドKFは、カブトは、ファイズは膝をついた。

「ぐうっ…!？」

「く…何だこれは！」

「……ッ、誰だ!？」

直前に耳を塞いでいた士と海東は、そこまで被害を受けていない。

そして…

気付けば目の前に、ダークウイングが現れていた。

更にその背中からは、ナイトが顔を見せる。

ナイトはサバイブのカードを引き、それと同時に持っていた剣もダークバイザーツバイに変形。

そのままカードを装填し、ナイトサバイブとなっていた：

「ナイ、ト…だと!？」

『ADVENT』

ナイトSVはアドベントのカードを装填、エコーの掛かった音声と共に疾風の翼・ダークレイダーが召喚される。尋ねる士を無視し、ナイトSVが二人に言う。

「乗れ！早く！！」

「お、お前は…」

「士！早く乗ろう！！」

「ま、て…！」

ブレイドKFが、キングラウザーを振ろうとする。

しかし、それに気付いたナイトSVは無理矢理士達を引っ張り上げると、そのままダークレイダーを上昇させた。

ファイズはそれを追うべくジェットスライガーを、ファイズフォンで呼ぼうとする。

だが、ナイトはすぐさま『シュートベント』でダークバイザーツバイをダークアローに変形させ、やって来たジェットスライガー目掛けて正確に………弓を射た。

それは見事に貫通し、ジェットスライガーは破壊されてしまう。

「なっ！？」

「くそっ、こうなればハイパークロックアップで…」

「……いや、いい。ここはあえて追わないで、行きそうな場所に先回りをするぞ」

飛び去るダークレイダーを睨みつけながら、ブレイドKFは変身を解除する。

ファイズらも同じように変身を解除させ、ディケイド…士の行きそうな場所に向かっていた。

〃  
〃  
〃

同時刻。

別の廃墟では、夏海は信じられないような顔で：ユウスケを見ていた。

「――暴走システム：ディケイドに、そんな力が！？」

「ああ。大ショッカーが秘密裏に作ったシステムで、一度それが起動してしまえば：ディケイドは完全な悪魔となって破壊活動のみを行う」

ユウスケの言葉に、夏海は動揺する。

今までそんな素振りは、一切なかった。

それを聞いたユウスケは「それは運よくそうならずに済んでいた」と、答える。

「そんな：それが起動されたら、この世界は」

「この世界だけじゃない。ディケイドが関わってきたすべての世界も、滅びてしまう：勿論、光写真館も。そうなってしまったら、ディケイドを倒す他ない」

「何か方法はないんですか！？……土君を倒さなくて、済む方法は：」

「――あることは、ある」

ユウスケがそう言うと、小さなオーロラが発生する。

そこから出てきたのは、キバーラ：

キバーラは明るい声で夏海に話しかけると、飛び回りながら訊ねる。

『はぁーい、夏海ちゃん♪……どうしても、ディケイドの暴走システムを発動させないで止めたいのよねえ?』

「は、はい……」

『鳴滝さんが以前に言っていたでしょ? あなたしか、ディケイドを止められないって……あなただけが、ディケイドを止められるのよ』  
「ど、どういことですか?」

「……キバーラの持つ力、それを使えばディケイドの暴走システムを止める事が出来る。だけど……その力を使うには、装着者が必要なんだ」

“装着者”

それを聞いた夏海は、驚いた顔を見せる……  
だがユウスケは、口元に笑みを作りながら夏海に言う。

「夏海ちゃんにはその素質がある。だから、鳴滝も夏海ちゃんを重視していたんだ」

「……だけど、それって……土君と戦うってことですか!?!」

『大丈夫よ。だって……』

キバーラは、夏海の首元にやってくると……軽く、噛み付く。

『かぷっ♪』

「——ああ……ッ?」

その瞬間、夏海の意識は急激に失われる。

薄れ行く意識の中で、夏海は、キバーラの声を聞いた……

『アタシがあなたの体を操って、ディケイドと戦う。…だから“夏海ちゃん”は”戦わないのよ……ウフフ”』

その光景を、偶然、夏海達を探していた津上翔一が目撃する。  
更に、彼はキバーラと…隣に居たユウスケに尋常ではない負の気を感じていた。

「なっ…。君達は、一体……」

「監視者のアギトか。丁度いい……お前から先に、潰してやるよ」

ユウスケの腰に、アークルが出現する。

そして静かに変身ポーズを取り、普段の彼からは考えられないほど低く…静かな声で、言い放っていた。

「変身」

（（（

遠く離れた場所で：

鳴滝は、苦笑していた。

「長い眠りに就いていた【奴】が、目覚めた。これで、貴様は終わりだ：ディケイド」

これで、終わる。

鳴滝はそう思いながら、懷に大切にしまっていたモノを取り出した。それは二眼レフトイカメラで撮られた、写真：

そこに映っていたのは、綺麗な笑顔を見せる亜麻色のショートボブの女性。

「——これでようやく終わる。そう、これで……」

〃  
〃  
〃

士と海東は、ナイトSVに連れられるがまま移動：

着いた場所は先程までの荒廃具合が嘘のように綺麗に残された、だがそれなのに人気のない高層ビルの立並ぶ区域だった。

ナイトSVはダークウイングから降り、士と海東に声をかけていた。

「いや、危なかったな。後ちょっと遅れていたら、とてもじゃないけど止められなかったよ」

「……お前、誰だ？」

「僕達を助けた所を見ると、味方……と思っていたのかな」

「うーん。俺はどっちでもないっていうか、ただ単にライダー同士が戦うのが嫌なだけだよ」

視線を落とすナイトSV。

恐らく、仮面の奥では苦悩しているのだろう……

顔は分からないが、いい思いはしていないのだと士も分かった。

「だが……海東。ライダーは俺達や剣崎一真達を除いて……全員消滅したんじゃないかったのか？」

「そのはずだよ。だけど、確かにどうしてナイトサバイブが……」

「……そうか、お前が【アレ】に辿り着いたのは30リセット前……

……もう忘れちゃってるよな。海東」

「「!?!」」

「世界は本当は、まだ消滅していない。……一部だけではあるけれど、この世界と融合して残っている場所がある。それは、様々な事象を得て“異端”として確立したライダーが最後に居た場所だけなんだよ」

ナイトSVが、変身を解く。

パリン。と鏡が割れるような音が聞こえたかと思えば、そこに現れたのは……

士もよく知った、顔だった。



「お、まえ…！」

「ああ、勘違いしないでくれ！…事情があつてこの体を使っているけど、今話している俺は『城戸真司』…紅渡の、仲間だ」

城戸真司、と名乗ったその男。

だが、その体は…

頭には包帯が巻かれ、スカイブルーのダウンジャケットを着ていたが…

門矢士の知る、仮面ライダーの一人  
…辰巳シンジの顔だった。

## 前編（後書き）

活動報告でも言っていた【予告】を使ったディケイド二次創作。うーん、元から素材が用意されているものは扱いづらい；

自分は原作を盛大破壊するのが大好きなんですよね。

自分の「こうしたらいいんじゃないかな」って言うのを漠然と考え、それを辿るように構成していくのが好きなので。

既に他者の手によって決められているルートを使うのは、難しいんです。

しかも予告は本当に漠然としすぎているものなので、それが逆に話を広げやすすぎて困るという：

余談ですが、今回は辰巳シンジを優遇したくて使ってるわけじゃないです。

あくまで【城戸真司】優遇です↑

ライダー同士の戦いを止めたい城戸真司。

多分、そんな彼にとってはリイマジの破壊やディケイドの破壊は許せないのでは？

……じゃあ31話で戦っていたのは何故だ、ってなるんですが（苦笑）

個人的には2つ説があり、

一つは【アレは城戸真司ではない別の龍騎】。

一つは【どうすればいいのか分からないまま戦っている城戸真司】。

前者は冬映画を見てもらえれば、分かるかもです。  
後者に関しては、城戸は龍騎本編でも苦悩している節が結構見られたので、そのオマーージュ？的な。

大事な事なので二回言います。

辰巳シンジじゃなくて、城戸真司の方を優遇しています。

まあ、剣崎一真や紅渡、門矢士に海東大樹、小野寺ユウスケの中にいる【存在】：ざっと言ってこの面々が、優遇されていますかね。  
鳴滝は微妙ライン。

## 中編

ピツ、ピツ、ピツ…

電子音が聞こえる、静寂の世界で。

“彼”はそこにいた。

世界は融合され、消滅したはずだった…

だが、“彼”を守るようにそこだけは“彼の世界”の形を保っていた。

もちろん人間は、いない。

いるのは、“彼”一人だった。

そして、白と機械音のみが支配する空間に…城戸真司は現れていた。

『つく…あいつ、よくもやりやがって……』

アルティメットクウガにやられた傷は、かなり重い。

普通の人間だったら、人体発火で死んでいた。例えばライダーであっても、だ。

だが、城戸真司は人間ではない。

人間にコンタクトを取るために、人間の姿をとった存在

———勿論、紅渡や剣崎一真もだ。

城戸真司はそれが幸いしてか、肉体のデータが一時的に消滅するだけで済んでいた。

そして今、彼は体が再生するのを待たずして：行動に出ていた。

彼も知っていたのだ。

自分の願い：門矢士もリ・イマズネーションのライダーも倒さずに世界を救うための機会が、今しかないことを。

彼はディケイドを倒す剣崎一真の意見にも、情報化のためとはいえリ・イマズネーションのライダー達を破壊させる紅渡の意見にも否定的だった。

前者はともかく、後者は修復さえできれば元には戻ると聞かされてはいた。

だが、それでも：

一時的に消滅させることに対して、心を痛めていた。

勿論それは、———門矢士自身に対する気遣いの意も込められていた。

記憶もないまま、ライダーを破壊する。

それはつまり、彼が傷ついてしまうのではないのかという懸念：

その上、士は大ショッカーの首領：

ライダーを破壊していけば彼の記憶が戻り、大ショッカーの手駒として、他のライダーも破壊してしまうのではないか。

そう考えていたからこそ、彼は独りで否定し続けてきていた。

いや、———独りというのは間違いだ。

彼と同じように二つの意見に対して中立を保っていた男：五代雄介。

その存在は城戸真司にとっても救いだった。

「どっちの意見も正しいと思うし、だけど、真司の言うとおり正しいとも思えない。……だから俺は、ここ（・・）で見定めたいんだ。どちらが正しいのかじゃなくて、——世界の行く末を」

少なくとも考えは違っていたが、それでも、救いであることに違いはなかった。

また、孤軍奮闘する彼を紅渡側の野上良太郎や津上翔一は、励ましていた。

二人は紅渡の意見に対して若干否定はしているものの、「渡は無茶をするから」と彼を氣遣って、彼を支えるために共に行動していた。津上翔一の話によれば、日高仁志もそうらしい。

これまで、度重なる妨害やループで結末を変えられずに、彼は苦悩していた。

そんな城戸真司の、唯一の好機。

それは：

『その怪我じゃ無理だ。俺がやる』

【龍騎の世界】で、初めて大きな異変が起こった。

鳴滝がディケイドを倒すためにと派遣した鎌田Ⅱパラドキサアンデッドの存在が、世界を大きく変えた。

元々、どのループにおいても鎌田は存在してこなかった。だが。

鎌田は今回のループで初めて、他の世界に介入する。

そして侵入した先のA T A S H Iジャーナル編集長・桃井玲子に正体を知られそうになり、殺した。

これもどのループにおいても存在しなかった事態だ。

さらにその事件で、龍騎——辰巳シンジがタイムベントを使用した。あの世界でのタイムベントは、「時間の巻き戻し」ではなく「対象とその周囲の数名を事件前の時間に飛ばす」。

その影響か、過去に戻り過去を変え未来すら変えた“彼”は…

【龍騎の世界】において、異端の存在となっていた。

異端の存在となったライダーは、その世界からは切り離され、存在が確立する。

小野寺ユウスケの肉体が消滅しなかったことに関しても、それで説明はつく…何故なら彼は、本来いるべき【クウガの世界】から切り離され、士達と共に別の世界を回っていたからだ。

自分の管理する世界のライダーとは、直接会うなどの干渉も禁じられている。

だが、ライダー大戦の際にライダー同士の攻防戦に巻き込まれ、辰巳シンジは意識不明の重体…

城戸真司も、アルティメットクウガによって肉体が消滅した身。

皮肉にも互いの姿を見ることが、声を聞くこともできない今の状況は、城戸真司にとって大きなチャンスだった。

『悪いけど、借りるぜ…体』

イメージしながら、その中に憑依すると…

城戸真司の意識を宿したそれはすぐに目を開け、病院を出ていた。

自らの手で、世界を救うために。

〃  
〃  
〃

話を聞いていた海東大樹は、頷く。  
「どうやら、城戸の話を信用したらしい。」

「……僕が士に説明しようとしていたことの一端と、一致している。  
…信じてもらえそうですね」

「だが、一つだけ納得がいかない。———どうしてお前が、ナイト  
のカードデッキを持っているんだ」

「俺達は管理者として、その世界ごとの管理を行っている。そして、  
有事の際はライダーのデータを用いて使用している……まあ、直接  
干渉ができない現状じゃあ有事も何もないんだけど」

つまり、そのデータを用いてナイトのカードデッキを得たというわけだ。

「龍騎はどうした？お前、龍騎なんだろう」

「…データの修復中」

「怪しいな…」

「そうかな？さっきの話が本当なら、仕方がないことかもしれない



けどね。それよりも……異端、と言っていたね。聞き覚えはあるんだが……記憶に無くなっている」

海東が城戸真司に尋ねる。

苗字が違って同じ名前、というのは剣崎一真と剣立カズマの件で見ている士にとっては……見た目は辰巳シンジ、頭脳は城戸真司という今の状況は一層訳が分からなかった。

だが、とりあえず彼は辰巳シンジを「シンジ」、城戸真司を「城戸」で呼び分けることにした。

因みに城戸真司は、辰巳シンジを「辰巳」と呼び分けている。

「それもそうだな。……城戸、シンジが異端ってどういうことなんだ」「さつきも説明したじゃないか！タイムベントで過去に戻って未来を変えたから、辰巳の世界の記憶は辰巳を異端と判断して、辰巳の存在を別の存在として確立させたんだ。……ディエンドがそのことを知ったのは30ループ前だから、忘れてるのも無理ないだろうし」「……そんなにリセットしていたら、そりゃあ、忘れるだろうね。ディエンドライバーの記憶容量にも限界がある」

海東はそう言うが、

「……士は「そんなに」という問題ではないように感じられていた。もしかしたら、このやり取りを、10回はおろか100回……1000回、もしくはそれ以上繰り返していると考えると……寒気がする。」

「で、ここからが本題なんだけど。……ディケイド……融合した世界を、助けたいか？」

「当たり前だ！……だが、方法が」

「方法ならある。お前がこれまで旅してきた記憶、ディケイドライバーに蓄積された世界の記憶。それらを融合させて、世界をもう一

度創造させるんだ」

城戸真司の発言に、士は、馬鹿を見るような目で見ていた。だが…

海東は感心したように、城戸真司に言う。

「驚いたね。…君はそれをいつ知ったんだい？」

「辰巳がタイムベントを行ってから、調べた。すっげえ大変で、頭も限界ってぐらいに使ったけどさ…」

「大体僕と同じぐらい、か。……士、彼が言ったとおりだ」「正気か？」

「勿論。——時間とは即ち記憶、君がこれまでに過ごしてきた時間…デイクイドライバーに記録された記憶。それらを使えばライダー達は復活する。純粋な意味で生き残っているライダーが、やっと一人現れたんだ…それに懸けるしか、方法はない」

「——残念だが、その希望は潰える」

かつ、かつ。

何者かが近付いてくる。

ずり、ずり。

何かを、引き摺りながら。

誰だ？

士は身構え、そして、その姿を見て驚いた。

「…お前達はここで、俺に、倒される」

やって来たのは、小野寺ユウスケ。  
そして、

彼が手に持って居たのは、

…ボロボロになった、津上翔一だった。

「——翔一さんッ!？」

「知っているのか、城戸!」

「俺の仲間だ。……テメェ…!」

「管理者の龍騎…いや、今は出来損ないのナイトか。生きていたんだな」

「…ったり前だ!」

城戸は敵意を剥き出しにしながら、ナイトのカードデッキを構える。  
だが…

それを止めたのは、海東だ。

「待て。…城戸君だったかな? 君は士を連れて行くんだ」

「海東!？」

「僕が相手だよ。小野寺君…いや、小野寺君の姿を借りた悪魔…かな?」

「誰でも構わない。どうせ、俺にやられるんだからな…」

ユウスケは、笑みを浮かべながらアークルを出現させる。

海東はディエンドライバーにカードを装填し、銃口を天高く上げた。  
それに呼応する形で、城戸真司は士の手を引いてこの場を離れた。

「っ…おい！」

「あいつは駄目だ！…お前だって、分かっているんだろう…あいつはお前の知っている小野寺ユウスケじゃない！！」

「だが！」

「士！——早く行きたまえ、それとも、ここで死んで二度とライダー達を甦らせない気か！？」

海東が、背を向けたまま叱咤する。

その言葉に、城戸真司の手を振り切ろうとした士の動きが止まり、……静かに言った。

「離せ。一人でもちゃんと走れる」

「……士」

「海東、…死ぬなよ！」

士はそう叫ぶと、一心不乱に走る。

城戸真司はそんな士の後を追いつ、そして追い越し、案内を始めた。そんな彼らが遠のいていくのを背中に感じながら、海東は、強がりとも取れる笑みを浮かべていた。

「…まったく、無理難題を押し付けなくてくれよ。……はっきり言つて、今の彼相手に生き残れる保証すらないんだからね」

「独り言が好きみたいだな？」

「誰かさん達のせいだね」

「まあいい、始めるぞ」

「「変身！」」

海東には、分かっていた。

目の前の相手には、どう足掻いても勝てないと。

現にその相手は、通常フォームともいえるマイティクウガでディエンドに変身した彼を圧倒している。

元々、勝機が薄いのは悟っていたのだ。

キバーラに闇の力を注がれた彼。

アルティメットとして覚醒した彼：

「ぐうつ…!?このっ、」

『Kamen Ride RIOTROOPER!G3!』

「無駄だ」

その力の証明は、津上翔一だった。

管理者はこちら側の存在に、直接干渉をしてはいけない：

だが、弱いわけではない。むしろその逆だ。

剣崎一真が正しい例で、本気を出せば、最強フォームに直接変身して戦えるほど。

そんな津上翔一が、負けた。

しかも、傷を見れば…どれだけ一方的だったのかが分かる。

「「ぐああ!」」

「…次の兵隊は何を出すんだ?ディエンド」

「……くっ!」

『Kamen Ride SCISSORS!GAI!RAIA!』

そんな相手に、勝てる筈はない。

それが分からない海東ではなかった。

だが、今は少しでも長く…土の逃げる時間を作りたかった。

各世界の仮面ライダーを救い、世界をも救う、最大のチャンス。それが、今だから。

どんなに切り離せない連鎖の渦中を、唯一打開できた、今だから。

『Kamen Ride KAI X A! DELTA! PSYGA!』

今回の周期は、非常に特殊だった。

辰巳シンジの件だけではない。

これまでのループにおいて、海東大樹は、初めて自分の世界に戻れた。

ライダー世界から断絶されている、ライダーとは関係がないはずの

【シンケンジャーの世界】にも、行けた。

RXやアマゾンは大ショッカーの暗躍があったからこそ、そしてライダーの関係する世界だからこそ行けた。

だが、今上げた二つは…

「ちいっ!」

『Kamen Ride IBUKI! ZANKI! TODORO  
KI! KABUKI!』

今回の世界は、そういう意味でも非常に特殊だった。

——今なら、9つの世界…そして今いる10番目の世界を救える——  
海東はそんな淡い期待を寄せていたのだ。

永遠とも思える連鎖を、ここで、止める。

だからこそ、今は…

「…カードが尽きたみたいだな」

「はあっ、はあっ…」

本当に、バケモノか。

ディエンドはこれまでに、数十体ものライダーを出してきた。

だが、その全てをいとも簡単に払い…その上、息も切らしていない。クウガはディエンドの首を掴むと、力強く握り締めた。

「ぐああッ!？」

「いい眺めだろう?…もうすぐ全てが、こうなっていく」

「……小野寺君…君の良心は、何処に行っただい…あのお人よしで!甘い!君は!…!…何処に行っただい…」

「——黙れ」

クウガは、ディエンドを掴んでいた手を離す。

ディエンドは勿論そのまま地面に倒れるようにして落ちる。

そんな彼にトドメを刺すべく、クウガは近くに落ちていた鉄パイプを使って超変身…タイタンフォームへと変形していた。

「…僕の悪運も、ここまで、か」

ディエンドは、諦めたかのように変身を解く。

そして、体を少し起き上がらせながら…空を見上げる。

——生憎の曇り空。今にも、雨が振りそうなぐらいだ。

彼は、今はもう既に遠くまで離れているであろう友を…思っているが、呟いていた。

「…士、死ぬな…」

〃  
〃  
〃

士と城戸真司は、走っていた。

走りながらではあったが、城戸真司は、話をしてくれた。

「――俺も今まで知らなかったんだけどさ、ディケイドライバーにはもう一つ、“旅をしている間の記録の保持”ができるみたいなんだ」

元々、ライダーを情報化するための存在…それがディケイド。

だからこそ、木野桜子さんは世界の崩壊が二度と起きないように、設計図の中に内密にその仕組みを組んでいたんだ。

データさえあれば、今後似たような事象が起こった際にも役に立つだろう。

更にこの危機感を後世にも伝えられるだろう…

そんな思いがあったからこそ、桜子さんはそのシステムを作った。

俺は桜子さんの研究資料を手にして、この事実を初めて知ることが



できた。

念のために五代さんにも相談したんだけど、

「渡や一真は話を聞く状態じゃない。むしろ、その資料を取り上げられる可能性だってありえる」

…ってさ。

だから誰にも見せていないし、五代さん以外には話してもいなかった…

「だけど、これを使ったり・イメージション修復は…最低でもそれに関係するライダーが残っていない限りは不可能に近かった」

「何だって?」

「ディケイドライダーには旅の記録しか残されない、ライダーの記憶は残らないんだよ。…お前の記憶を使っても、完全修復は難しそうだし」

「待て、そうなる」と

「…辰巳のデータを元に修復を行う。あ、安心してくれ。破壊とかそういう方法じゃないから!」

城戸真司は慌てて、弁解をする。

士は完全に鵜呑みにするつもりはなかったが、可能性を知っている人物は、今はもう彼のみ…

とりあえず、話を聞く事になっていた。

「リ・イメージションの世界でも、お前は、写真を撮ってきたんだろう?」

「ああ」

「だけど、ライダーが消滅すれば消滅した世界のライダーは完全にいなくなる。写真という存在からも」

「…」

「そして、そのライダーに関する記憶は徐々に薄れていってしまおう」  
「何だと？」

「士。――剣立カズマの顔を思い出せるか」  
「勿論だ。ドジで、抜けてて、あいつはチーフだって言っているのに、チーズ…だっ…て…」

士の足が止まる。

頭の中にもやが掛かったかのように。

声も

顔も

一緒に過ごした記憶の大半ですら

思・い・出・せ・な・い・

「――ッ、」

「辛うじて、その程度の記憶はあるみたいだな。でも、完全には…  
…思い出せない」

「……カズマだけじゃない。タクミ、ショウイチ、ソウジ、アスム、  
ワタル…覚えているはずなのに、覚えていたはずなのに、……今は  
少ししか思い出せない…！」

「でも、完全に忘れたわけでもない。士。お前はさっき『チーフと  
チーズを間違える』って言ったよな？……今お前はそれしか覚えて  
いない、だけど、裏を返せば記憶がまだ残っているんだ。それが唯

一の希望なんだ！」

そう言われ、士は覚えている欠片の断片を…必死で、頭の中で拾う。タクミは誰かの夢の為に戦い、

ショウイチは自分の力に苦悩し、

ソウジには妹と祖母がおり、

アスムは（何をどう間違ったか）海東の弟子ということになっていて、

ワタルはユウスケに心を開いていた、

ついでに彼が会ったモモタロス…馬鹿だ。どう馬鹿だったのかは、忘れたが。

「リ・イマジネーションのライダーは、ディケイドによる破壊以外の消滅は…誰からも忘れられるという意味ではない」

「…」

「だけど、辰巳がまだ残っている。こいつが消えないうちはお前の記憶も保障される、僅かながらに残った記憶での修復を行う。それが最後の希望なんだ」

「だが、たった少しの記憶で戻るのか？…こんな、少ない記憶だけで…」

「戻るさ。少しでもあったとしても、記憶は記憶…それにさっき言っただろう？『辰巳のデータを使う』って。…俺達のいる【管理者の世界】にまで行けば、お前とディケイドライダーの記憶、そして辰巳のリ・イマジネーションとしての存在と異端として確立されたデータを使えば…ライダー達は復活する」

士は、ずっと思っていた事を尋ねる事にした。

先程から城戸真司が説明しているのは、「ライダー達の復活」についてのみ。

…彼らの存在すべき世界については、説明されていなかったのだ。

「あいつらの世界はどうなるんだ？」

「ここまで派手に融合しちゃったからなあ……ライダー達が揃った後で、その記憶データを元にこの世界と融合させれば何とかなる」

「……いいのか？」

「海東から聞いたんだろ？世界は元々一つだった、って。……それが元に戻るぐらいのことだ」

城戸真司はそう言うが、

（いや、……本当は一つ……代償として世界共通のモノを失う事になるんだけどな）

と、心の中で訂正していた。

勿論それは、士に気取られていない。

「管理者の世界には、この世界にある【記憶の海】を通る必要があるんだ」

「海、だと？」

「そして記憶の保管庫……俺達は仮に『アーカイブ』って呼んでいるんだけど、それに辰巳やディケイドライバーのデータを流して、お前の記憶も流せば大丈夫だ」

「そうだ。そういえば、ユウスケはどうなるんだ？」

「……あいつは、」

城戸真司が言葉を詰まらせた。

その時だった。

士達の目の前に、銃弾が放たれる。

それは地面に着弾したが、次は本気で狙ってくるだろう。  
一体誰だ、と思う士であったが：砂埃が晴れた後の姿を見て、驚愕していた。

長い髪を後ろで結い、黒い服に身を纏ったその影は……

「夏、海……？」

（  
（  
（

剣崎一真、並びに紅渡達は絶句していた。

——友とも呼べる男、津上翔一が：かなりの深手を負っていたのだ。

それだけではない。

周囲は既に形を保っておらず、砂ばかりが広がっていた：これを見た乾巧は、憤っていた。

「くそっ、……ディケイドか！？」

「しかし……そんな、まさか」

「そうだ。確か、奴は津上の顔を知らないはずだ」

動揺する野上良太郎の横で、天道総司が呟く。

彼の意見には、紅渡も納得する：

だが、顔を知らずとも今のディケイドならば自分の身を守るためにライダーを倒すことはありえるだろう：

そう思っていると、「いや」とヒビキが告げた。

「どうやら、ディケイドじゃないらしいよ」

「「え？」」

ヒビキが静かに指を刺す。

そして、その先に居たのは……

——津上翔一以上に無残な姿となった、海東大樹であった——

体は血まみれで、既に生氣はない。

まさか追われているとはいえ、かつての仲間だったディエンドをここまで……？

流石にこの事実により、ディケイドのせいだという考えを否定せざるをえなかった。

「……確かに」

「ここまで来ると、考えられるのは……ナイトか、或いは……」

「——鳴……滝……！」

紅渡と天道総司が話す中、剣崎一真が拳を握り締めていた。すると：

砂ばかりの世界を、歩いてくる影。

それは、——小野寺ユウスケ。

「……他の管理者達もお出ましか」

「お前は、リ・イマジネーションのクウガ……！」

「……かつてはそうだった。だが、今は違う……俺はようやく手に入れたんだ。全てを圧倒するほどの、力を……その管理者やディエンドは、そのための礎となった」

「なん……だと……！」

「お前が、津上を……！」

管理者達は目の色を変える。

眼前の相手を、【敵】と見なしたのだろう。

ユウスケは怪しげな笑みを保ったままで、告げた。

「いいのか？直接の干渉をしても」

「……致し方ありません」

「ちよいと、お灸を据えてやらないとな」

「行くよ、モモタロス……皆」

「許さない……！」

「お前らはトドメを刺すなよ。……俺がトドメを刺す」

「それはつまり、自分が消えてもいいという覚悟か？……それは俺の役目だ、乾」

全員が変身の体勢を取る。

ユウスケはアークルを出現させながら、低い声で、言い放った。

「……ここでお前らを消し、残る管理者や、ディケイドをも消す。――

――その後には世界だけ残される」

「「……？」」

「……世界は、俺が貰う。だから安心して………死ね」

〃  
〃  
〃

銃を構えた夏海は、士に容赦なく弾を撃つ。

士は城戸真司と共に避けるが、このままでは埒が明かない。

城戸真司はどうにかして士だけでも、と思ったが、自分のものなら  
ともかく…この体を犠牲にするわけにはいかない。

そう思っていると、士が夏海に叫ぶ。

「おいっ、夏海！何してんだ、目を覚ませ！！」

「——煩い！悪魔…ディケイド！！」

「なっ…」

今まで仲間として共に過ごしてきた、夏海からの一言。

一体、どうして…

そう思っていると、城戸真司が士に叫んだ。

「馬鹿っ、立ち止まるな！逃げるぞ！！」

「だが…！」

「彼女は恐らく、キバーラによって流し込まれた魔皇力の力で催眠  
状態に陥っているんだ！目を覚まさせるには、大元を叩く必要があ  
る！！」

「……『キバーラの魔皇力』？」



士は思い出した。

そういえば、ユウスケはおかしくなる前に…何かをされなかったか？  
そうだ。

確か、ユウスケは……

『アタシが蘇らせてあげるわ。ただし、——アルティメットクウ  
ガとしてね』

「…ッ！」

ユウスケが死んだ。

その瞬間にキバーラは彼に何かをしていたようだが、もしかしたら、  
魔皇力を流し込んでいたのだろう…

これで、二人がおかしくなった理由が分かった。

分かった上で、士は叫ぶ。

「——キバーラ…出て来い！夏海とユウスケを、元に戻せ！！」

「ディケイド！？」

『アタシなら、ここよおん』

ウフフフ、と笑いながらキバーラはやってくる。

そして彼女は夏海の肩に止まり、士に言い放った。

『とんでもない事になっちゃったじゃない？ディケイド』

「黙れ。……お前がユウスケや夏海に何かをしたことは、分かっているんだ。二人を元に戻せ！」

『あら、アタシだけのせいじゃないわよ。——ユウスケに関して

は』

「どういうことだ!?!」

『知らないなら教えてあげる。……ユウスケはね、鳴滝さんがアークルに予め組み込んでいた“暴走装置”によって別の人格が植えつけられていったのよ』

別の人格。

士は、信じられないような顔をする…

その一方で城戸真司は、キバーラに尋ねていた。

「そういえば、…小野寺ユウスケは鳴滝からアークルを受け取ったって……まさか!」

『そう!……そうやって暴走装置の組み込まれたアークルをつけて、万が一ディケイドを破壊できなくなっても、変身するたび…戦うたびに闇の人格を育てていったのよ。で、万が一の時はアタシの魔皇力を注いで裏人格を目覚めさせるって算段だったワケ。すべては、あなたを破壊するためにね……ディケイド!!』

「なん、だと…。……鳴滝は、どうしてそこまでして俺を倒そうとする!?!何故…」

『あら?ディエンドも城戸真司も教えていないわけ?呆っきた。せっかくだから、教えてあげるわ』

「…どういふ…」

「——言うな、キバーラッ!」

『…やっぱりやーめた。それよりも、夏海ちゃん…準備はいい?』

キバーラの呼びかけに、夏海は頷く。

何をする気だ。

そう思っていると、夏海は銃を捨て、キバーラを手を持った。

「私が、ディケイドを倒す！」

「夏海!？」

「――変身」

無数の紫のハートが、舞う。

そしてそれらは、花に群がる蝶のように夏海の周りに集まり、ライダーの形を構成していく。

白いボディ。

紅き目。ベルト。

手に持つはボディと同じカラーリングのサーベル：

――仮面ライダー・キバーラ――

「な…」

『これがキバーラの真の姿よ』

「ディケイド、戦うな！今は、記憶の海に行くことが…」

「――悪いが、これだけは譲れない。夏海は、俺が元に戻す!…  
…変身!！」

『K a m e n   R i d e   D E C A D E !』

士は、ディケイドライバーにカードを装填。

そして灰色のオーロラを纏いながら変身するそれは、マゼンタのカラーをしたライダー…

仮面ライダー・ディケイド。

城戸真司は舌打ちをしながら、士に叫ぶ。

「――おいっ！」

「…お前こそ離れてろ！シンジの体でくたばってみろ、世界を救えなくなるんだぞ！！」

「……分かったよ。だけど、…お前だってくたばるなよ！？」

そういうと、城戸真司はディケイドから離れる。

それを見計らったディケイドは、キバーラと戦おうとライドブツカーを振るう。

だが…

ふと、脳裏に夏海の顔が浮かび…動きが止まる。

「……ッ」

『あら？あんなに意気込んでいたのに、戦えないの？？』

キバーラは門矢士の弱点を知っている。

大事な女性が…愛した女が掛っていると、どの士も脆い。

女の武器を逆手に取り、キバーラはキバーラサーベルで攻撃していた。

『ほうら、やってみなさいよ！』

「ぐうつ！…があっ！？」

「ひでえ……これじゃあ、一方的じゃないかっ！？」

城戸真司は、居ても立ってもいられずに…ナイトのカードデッキを構える。

だが…

そんな彼の肩を、掴む男がいた。

———剣崎一真だ。

その背後には、紅渡もいる。

しかし、二人の体は…かなりボロボロになっており、剣崎一真など、額から緑色の血を流していた。

「……貴様がナイトだったか、城戸……」

「剣崎！ 渡も…なんで、そんなに……」

「予定が変わりました。――ディケイド！」

「くそっ…お前らまで！」

ディケイドは、叫ぶ。

この状況で剣崎一真・紅渡を相手にすれば…勝機は絶望的。  
だが…

紅渡はキバットを使い、その魔皇力を自身に流し込ませる。  
そしてそのまま、変身を行う…

仮面ライダー・キバ。

漆黒の月夜が似合うその姿は、すぐさま攻撃を仕掛けた。

だが

その相手は

『きゃあ!?!』

……キバールであった。

キバはディケイドの方を向くと、早く行くよう言い放つ。

「ディケイド、早く行ってください!…あなたでは、光夏海への情

愛が邪魔をして倒せない」

「なっ…？」

「それにキバーラは、僕…いえ、キバットの因縁の相手なのです」  
『キバット族から、裏切り者を出すわけにはいかないからなあ！』

ディケイドがぼかん、として見てみると…剣崎一真が叫ぶ。

「何を、している！…ここは渡に任せて行くぞ」

「なんだと？だが、…お前は俺を破壊したかったんだろう？」

「ああ。門矢士という存在はな…だが、…渡も言ったとおり状況が変わった。————ディエンドが死んだんだ」

「…なん…っ、…え…？」

剣崎一真の言葉は、ディケイドには到底信じられなかった。

だが、聞いていた城戸真司が視線を落とす。

呆然とするディケイドに、剣崎一真はゆっくりと歩き…あるものを、手渡した。

…それは、シアン色が血に染まった…ディエンドライダーであった。

「————ッ！」

「ディエンドが死んだ以上、もうリセットは不可能。お前を倒したとしても、何も変わりはない…この状況下での唯一の希望は、皮肉にも城戸…お前の【賭け】だけになった」

「剣崎…：…だけど、俺の賭けはリ・イマジネーションのライダーを」

「分かっている、…お前の行動は…津上から聞いていた。渡もな」

あっちゃ、と城戸真司は頭を押さえる。

津上翔一は口が軽いわけではない。

が、暫く問い詰めていると…ぽろつと口に出てしまうことは、ある。管理者としてどうなんだ、と思うところだが、城戸真司は剣崎一真に尋ねた。

「でも、知っているなら尚更だ。なんで…」

「…天道、乾、野上、そしてヒビキさんがやられた。俺と渡も、正直、満身創痍の状態だ…“奴”を倒すには、もはや、リ・イマジネーションの奴らの力を借りるしかない」

「奴…まさか！」

「——鳴滝…馬鹿なことを、…まさか…世界分離の根源を…小野寺に植え付けていたとはっ…！」

「世界分離の根源、だと…？」

デイケイドは、変身を解きながら呟く。

剣崎一真は「話は後だ」と小さく言うと、体は辰巳シンジの中身城戸真司の腕を掴み、さらに土の首根っこをも掴んで走り出す。

そのスピードは、人間とは思えないほどのもの。

あえて例えるなら、マッハジャガー並み。

「話は移動しながら教えてやる。行くぞ！」

「ぐあっ！？…なっ、こら！」

「ぎゃー！痛い、痛いって！？これ辰巳の体…！」

「知っている。お前の体だったら、耳を引っ張っていた」

「何その扱い！？——あーッッッ…！」

一見見るとギャグテイストだが、やられている側は、まさにこのまま首や腕がもぎ取られるほど。

そんな彼らを見送りながら、キバはキバーラに向き直る。  
キバットは低い声で、キバーラに訴えていた。

『…キバーラよお、どうしてお前はあいつの元にいるんだよ！戻って来いって!!』

『あら、ごめんなさい。ただどね、アタシはアタシのしたいことをする。だって退屈じゃない?』

『キバーラ…』

「無駄だキバット。——彼女は情に流されて寝返るような性格じゃない」

紅渡に言われ、キバットは悟った。

確かにキバーラは上に流されて寝返るような性格ではない。

それは、他でもないキバットが一番分かっていた。

『管理者のほうがよく分かってるじゃない。そういうコ・ト・なの・よ♪……お兄様』

『だな。——渡、行くぞ』

「ああ!」

『ウッフ、楽しませて頂戴!』

キバが鋭い蹴りを放つ。

しかし、キバーラは華麗な動きで回避する…

体術では、身軽なキバーラのほうが優位のようにだ。

だが、戦闘の経験ならキバ。

キバは青色のフェッスルをキバットに噛ませ、ガルルフォームへと変形する。

『ガルルセイバー!』

「はあっ!」



『きゃあっ!?!?…ちよつとお、乱暴すぎるじゃない』

動作の美しいキバやキバーラとは対照的に、野生的な動きを得意とするガルルフォーム。

キバーラの剣捌きは型に入ったもので、動作もクセも少ない。

だがその分、攻撃パターンさえ見切れれば手強い相手ではない…

逆に型から外れ、動きの読めない剣の扱いをするガルルフォームの方が、手強い相手とも言える。

『渡!』

「分かっている、…キバーラッ!」

『…』

キバGFはガルルセイバーで、ベルトのバックル部分を狙おうとしていた。

そこに取り付けられているキバーラさえ、倒せば。

光夏海に影響はない。

はずだった。

『…狙いがバレバレなのよ』

キバーラはサーベルによる素早い突きを、キバの腹部に放つ。

それは見事に中央を、貫通した。

紅渡は、鋭い痛みに襲われる。

しかし腹部からじわじわと感じる鈍痛に耐えながら、最期の気力を振り絞った一撃を、キバーラに叩き込んだ。

「……………あああああ！」

キバGFの剣が、キバーラを正確に捉えた。

捉えただけでなくそれは完全にベルト部分をも真つ二つにし、キバーラは地面に弾き飛ばされる。

『きゃあん！？』

『渡…！』

「……キバ、ツト…すま、な…いね。……くうっ…！」

キバの変身も、解かれる。

紅渡は地面に膝をつき、崩れるようにして倒れた。

白い服装からは、赤い鮮血が漏れ出ている。

——管理者は、自分を確立しているデータさえ壊れなければ…肉体がなくとも存在することが可能だ。

それに肉体は修復すれば済む話だ。

しかし、受ける痛みは…データであれど相当なもの。これが、直接干渉の影響なのだ。

「……こんな事なら、最初から…全てを教えていれば、よかつた、のか……な」

『渡う…』

「——う、うん…」

か細い声。

先程までキバーラに操られていた光夏海が、正気を取り戻したのだ。彼女は頭痛を感じつつ、自分の置かれている状況を把握しようと呟いていた。

「私は…。ここは、一体……」

「……目覚めたのですね、…光…夏海さん」

「あなたは…ッ！大変、怪我をしているじゃないですか!!」

夏海は自分の事など放棄し、紅渡に駆け寄った。

恐らく、仮面ライダーキバーラとして戦っていた時の記憶はないのだろうか…

敵として対峙していた紅渡にを心配していたのだ。

しかし紅渡は、ニコ、と笑みを見せながら…夏海に告げる。

「大丈夫、です。……肉体データが飛ぶだけです、から…」

「データ…? ……あなたは、一体」

「…ディケイド…門矢士を、旅に送り出した者です」

——門矢士。

それを聞いた夏海は、表情が変わる。

満身創痍の紅渡を凝視しながら、夏海は訊ねていた。

「……あなたが、士君を…」

「ええ。…大ショッカー首領と、しての…記憶を封じ込め……世界を救う、ために…旅を……」

「あの、——士君は、破壊者じゃないですよ？士君には! ……暴走システムなんて、ライダーを破壊するための暴走システムなん

て…ありませんよね……」

夏海の言葉に、紅渡は目を見開く。

——何を、言っている。

ディケイドライバーの機能は、ライダーを情報化するもの。  
完全に破壊する力はおろか、暴走システムなど…存在してはいなかった。

それは、士を旅に送り出す前に完成したディケイドライバーを解析した……紅渡自身だから分かる。

しかし…

渡には既に、長々しく説明している暇はなかった。

…彼の肉体データは、もはや、限界に近かったのだ…

「光さん、」

体が、消滅する。

それを見た夏海は、口を塞いだ。

と同時に…震えが襲い掛かって来たのだ。

不安な渦中にある彼女。それを今救えるのは、本来なら門矢士ただ一人…

しかし、彼は今いない。

だからこそ紅渡は、自分が代わりに彼女を安心させるよう……優しく、告げた。

「——あなたが、心の奥で…信じているものが、……真実です」

その言葉と同時に、紅渡は消滅した。

彼の言葉を聞いた夏海は、ただ、呆然としていたようだが……  
首を何度も横に振り、迷いを振り払ったかのような……輝きを持った  
目で前を見ていた。

「私が信じるもの。……そうです、士君は……悪魔では、——破壊  
者ではありません……！」

——私が信じないで、誰が信じるんですか。

——ユウスケの言葉は、もしかしたら本当なのかもしれない……

——だけど、私は……士君を信じる。

例え世界をすべて敵に回したとしても、後悔する結末だったとしても、  
私は士君を信じたい……！

「……士君を、探さない」と

夏海は立ち上がり、空を見る。

この空のどこかに……あの人はいるのだろうか。

そんなことを、思いながら。

しかし。

夏海も紅渡も、気付かなかった。

——キバーラが姿を消していることに——

## 中編（後書き）

辰巳の使い道を真剣に考えたらこうなった。  
異論は認める。

言っちゃ何ですが、……殆どが「シンジがレンに存在を食われている」的な感想を見るんですよね。

ハルルシリーズはそんなのぶっ飛ばしてる勢いですがww

城戸がナイトに変身する、というのは13 Ridersを見てやりたいと思っていた。

：サバイブにまでする予定はなかったですが。

つがみーや海東の扱いは……真剣に謝ります。

でも大丈夫です。

：なんとかなる↑アラタかよ

士がダメダメです。

大丈夫かこの主人公……と思っているでしょうが、次回はそれを払拭する勢いなのでご安心を。

むしろ城戸真司が主人公っぽいな。

ごめん士。

そして紅渡もごめんよ…

でも展開上、【管理者】には“肉体データが飛んでもらわないと困る”んです。

あ、大丈夫。つがみんとか渡は見えないだけで生きてますから。

後編をお楽しみに。



## 後編

剣崎一真は走っていた。

両手には、門矢士と城戸真司（但し中身は）を掴んでいる。

あれほどの傷を負っていて、よく走れるな…

士はそう思っていたが、ふと剣崎一真の体を見ると、いつの間にか全身の血が止まっている。

不思議に思っていると、剣崎一真が突然呟いた。

「……気になるか」

「うおっ！？…い、いや、別に」

「俺のデータは人間というよりアンドロイドのそれに近い。……だから、管理者の中では唯一肉体データと意識データが簡単に消滅することはない」

「一真はデータ修復も早いんだぜ。…唯一消滅する危険があるとするれば、直接干渉をした時ぐらいだ」

城戸真司が説明する。

彼の話が本当なら、自分を倒すということは＝自身の消滅。

だが、剣崎一真はそれをしようとしていた…それどころか、門矢士に深い恨みを抱いているように思える。

一体何故…

そう思っていると、剣崎一真は急にスピードを落とす…士に言った。

「……ここから先は、鳴滝の妨害も予想される。奴はお前を消すために、【記憶の海】の前で立ちはだかるだろうからな」

「鳴滝…」

「そこで。……お前のケータッチを貸してもらおう」

「…は？」

そこでどうして、ケータッチが出てくる。

士も、城戸真司も首を傾げていると…剣崎一真は、簡単に説明を始めていた……

その頃。

【記憶の海】と呼ばれる場所で、鳴滝は、待っていた。

呼び名からして特殊なものかと思われるが、見た目は至って普通の海…

鳴滝が振り返ると、傷ついた体でよろよろと飛びながら…キバーラがやってきた。

「…キバーラか」

『管理者の紅渡にやられちゃったわ…だけど、あいつは今頃肉体データが消滅している…記憶データの状態じゃ邪魔はできないでしゅうねえ……』

「そうか」

短く答える鳴滝。

だが、キバーラは鳴滝の肩に止まりながら…「ねえ」と尋ねる。

『本当にディケイドを消す気なの？ 奴を消したら、あなたは…それに“あいつ”はどうするのよ』

「…ディケイドを倒すのは私の義務だ。そして、……奴も合意の下

での契約だ」

『ならいいんだけど。……あら？』

キバーラが声を上げる。

鳴滝も、その存在に気が付いたのか……表情を険しくさせる。  
その存在とは、——勿論……

「来たか……」

〃  
〃  
〃

士達は、遅れて【記憶の海】までやってくる。  
そして……

待ち構えていた鳴滝・キバーラを見て、士は叫んだ。

「鳴滝！それに、ユウスケ……お前……」

「来たなディケイド、世界の破壊者よ！」

待ち構えていたとばかりに、叫ぶ鳴滝……

剣崎一真や城戸真司は、そんな彼に言い放つ。

「——それはこちらの台詞だ、鳴滝ッ！」

「そうだ！あんた、なんてことを…あんたのしていることは、世界を破壊する行為だ！！」

「剣崎、城戸…？」

「違う。私は、私自身の手でディケイドを倒す…それだけだ！そもそも、門矢士さえ存在しなければ…世界も滅びず、彼女を失うこともなかった！！」

鳴滝は肩に乗っていたキバーラを掴み、その手を自分の首筋に向ける。

一体何をする気だ。

士がそう思っていると、キバーラは鳴滝に再度確認していた。

『本当にいいのね？』

「構わん。やってくれ、キバーラ」

『……かぷっ♪』

キバーラは魔皇力を注ぐために、鳴滝に噛みつく。

すると、魔皇力で活性化されたのだろうか…

鳴滝はみるみるうちに、若返っていく。

「なっ…！？」

「正体を明かす時が来たようだな」

鳴滝はキバーラを首から離す。

先程の戦闘のダメージ、そして、鳴滝に魔皇力を与えた影響からか…キバーラは力なく、倒れる。

しかしそんな彼女を無視しながら、鳴滝はその姿を見せた。

勿論、それを見ていた士は…呆然としていた。

「なん…だと、」

「さて、ディケイド。改めて自己紹介をしよう…私の名は鳴滝、だが、これは仮の名前。」

本当の名は…

——門矢士だ」

目の前にあったのは、士と瓜二つの男…  
動揺する士に対し、剣崎一真は汚物を見るような眼で鳴滝…もう一人の“門矢士”を見ていた。

「な…」

「この世界においては、私が“本当の士”と言うべきだろうか」  
「お前が本当の士だと? ……どういことだ!?’」

「——いや、本当というよりは…【本来辿るべき未来から来た】  
門矢士、だな」

剣崎一真の言葉に、士は眼を見開く。

本来辿るべき未来の士

それはつまり、鳴滝は過去を変えるべくやってきたということ。そう思っていると、城戸真司は深々と謝りながら士に言った。

「……ッ…ごめん、ディケイド！黙っているつもりは、なかったんだ」

「城戸…」

「あの人は一真が言ったとおり、破壊されたはずの未来の世界からやってきたんだ。……そして、それを変えるがために…未来から、やってきた」

「——どうして教えなかった、というのはこの際なしにしておく。だが、一つだけ……つまり鳴滝は、過去の俺を消すために行動していることになる。俺を消したら自分も消える、それに何の意味が！」

「俺も城戸もそれに答える気はない。本人の口から、聞くんだな」

剣崎一真が、冷淡に言い放つ。

鳴滝を前にした時から、彼は、非常に不機嫌だ…

城戸真司もそんな彼の気持ちがかかるのか、目を反らす。すると、“門矢士”自身が…その答えを教えてくれた。

「……いいだろう。冥土の土産に、教えてやる…貴様自身の罪をな」  
「…」

〃  
〃  
〃

私は、物心がついた時から大ショッカーの首領として君臨していた。しかしそれはただの傀儡で、本当は、世界を自由に渡れる力を利用されているだけにすぎなかった。それが…いけなかったのだ。

大ショッカーの一部は、私に内密である存在を復活させていた。それは、かつての仮面ライダー達を苦しませた…怪人達の怨念の集合体

……私は仮に、それを【イレギュラー】と呼んだ。  
イレギュラーの復活により、アポロガイストや十面鬼といった怪人達も作られ…大ショッカーの人員数は増えていった。

だがそのイレギュラーは突如としていなくなった。  
幹部達は「気にする必要はない」と、大した心配をしていなかった。だが…

イレギュラーがいなくなってから暫くして、世界に突然異変が起った。

世界が突然、9つに分かれ始めたのだ。

しかし世界が分離したぐらいでは大した問題ではないと、私も…奴らも放置していた。

だが、この時我々は知らなかった。

——9つの世界に、それぞれの怪人と仮面ライダーが生まれたことに——

そしてそれから、10年近くの月日が経った。

その日を境に、分離していた世界は再び一つになろうと…融合するため、地球と地球とが引き合い始めたのだ。

しかもその世界は、中心点であるこの世界に集まりつつある…

大ショッカーは何とかして、それを食い止めようとした。

…不思議に思うか？

この時は、「ディケイド」という存在はいなかった。

つまりこの世界は、9つの世界の融合に巻き込まれて消滅するはずだったのだよ。

それは大ショッカーとて例外ではなかった。

そして世界は、私を除いたすべてが…破壊され、消滅していった。

今はディケイドという存在、そして、【システム・ディケイド】のために管理者達が“中心世界を破壊させないために”崩壊を引き留めている。

そして大ショッカーもその恩恵を受け、例え世界が消滅しようとも自分達は生き残るように改変されていた…

だが【システム・ディケイド】が始まる前は、先程言った通り全てが消えてなくなるのだ。

たった一瞬で、全てが。

ただ一人、私は虚無だけが残る世界に残された。

長い間、ただ、一人で…

途方もない時間を過ごしていた。

——どうしてこうなった？

——どうすれば世界は戻るのだ…

そんな事を考えていたよ。



永遠に近いほど長い時間が過ぎ去り…

そして私は気付いた。

【過去に行って世界の崩壊を止めればいいのだ】

そうだ。

そうすれば、世界は元通りに戻るはず…

世界が融合して崩壊する事も、ないはずだ……！

私はオーロラを使い、すぐさま行動に出た。

世界の融合が始まったのは、2009年1月25日…

融合を止めるには、1ヶ月や4ヶ月程度では時間が足りなさ過ぎるだろう。

そこで、2008年1月27日の“この世界”に飛んだのだ……

私は過去に渡ってすぐに、協力者を探した。

だが、私の話など誰も信じてはくれなかった。

それどころか私を「変質者」だの「頭のイカれた男」だの、罵言を吐いて…

勿論住む場所も金もない私は、毎日を公園の遊具や鉄橋の下で過ごしていた。

そんなところに、唯一つの、光が見えた。

『あなた、大丈夫ですか？』

亜麻色のショートボブの髪。

赤いフレームの眼鏡をかけた彼女は、私に声をかけていた。そして見ず知らずの私にこう言ったのだ。

『よかったら、家に来ませんか？…ちょっと狭いですけど』

彼女の名前は、木野桜子。

とある科学研究所の研究員として活動している上、大学で講師も勤めているほどの女性だった。

私は彼女に、世界の危機を教えた。

最初は半信半疑であったようだが、暫く話しているうちに…彼女は私の話を理解したのであろう。

『そうなんですか…大変でしたね』

『ああ…だが、誰も信じてくれない』

『…私は信じますよ。あなたの話を』

——初めてだった。

私のような者を、信じてくれると言った人間は…後にも先にも、彼女だけであった。

その言葉に私は、ひどく感動し…そして、涙を流していた。

彼女はそんな私を宥めながら、あることを、訊ねた。

『ところで、あなたのお名前は？』

私の名前。

“門矢士”という名前。

だが…

私は世界の融合の原因が、大ショッカー…つまり自分の生だと捉えていた。

元を正せば、大ショッカーが“イレギュラー”を呼び覚ました事の原因がある。

それは私自身の罪…ならば私は、その罪を償うためにもその名を改めなければならない。

——過去の自分との、決別のために。

『……鳴滝だ』

鳴滝とは、かつて私の身の回りの世話をしていた使用人の名前であった。

大ショッカーとは無縁の、普通の人間…

そんな彼も、大ショッカーに逆らって殺されてしまった。勿論私には、彼を救うことはできなかった。

それから暫く経って、紅渡が現れた。

そして奴は、【システム・ディケイド】を発案した…

ディケイドドライバーなるものを製作し、それぞれの世界に生まれた仮面ライダーを一時的に情報化することで情報の修正を行う…

勿論失敗した時の際の保険として、ディエンドドライバーも製作したがな。

だが、制作費も立派な実験施設もあるわけではない私達には……それをすることはできなかった。

制作費、というよりディケイドドライバー作成の為に必要なものは紅渡や津上翔一、五代雄介などが準備してきていた。

実験施設も、天道総司らが提供をしてくれた。

……勿論そこにいる剣崎一真、並びに城戸真司もディケイドに必要な……ディヴァインオレ鉱石という未知の鉱物を用意してくれたな。

しかし、材料がどれだけ揃っていても、開発する場所と詳しい図面がなければ……

そこで私は、一人の男の存在を思い出す。

——結城丈二——

大ショッカーでもかなりの技術を持った研究者で、彼いなくては大ショッカーは成り立たない、と言わしめるほどだった。

彼の力を借りれば……

私は桜子、そして紅渡と共に結城丈二を説得に向かった。

『世界の危機が近付いている、だから力を貸して欲しいと？』

『ああ、そうだ。——このままでは、お前のいる大ショッカー自体も終わりだ』

『お願いします。私達に力を、貸してください……ディケイドライバーと、ディエンドライバー……この二つの製作を行ってくれるだけでいいんです！』

『私には関係がないな』

結城丈二は、冷たくそう言い放った。

やはり駄目か……

そう諦めかけた、その時だった。

『だが、——お前達の言う通り……この世界の周辺にある惑星が年々接近して来ている。まるで、磁石に引き寄せられるかのようにな』  
『では……』

『お前達の話が本当なら、大ショッカーだの言っている場合ではな

いようだ。……力を、貸そう』

結城丈二が、私達の説得に心を動かされたのだ。

私と桜子は…大変喜んだよ。

彼の力があれば、【システム・ディケイド】は完成したも同然だった。

11月。

ディケイドドライバー、並びにディエンドドライバーの設計図の製作が完成した。

実際の製作時間は、急ピッチで行えば2月ほど掛かるそうだ…もうすぐだ。

そう思いながら私は、桜子の部屋に来ていた。

彼女の部屋には既に剣崎一真が来ていたようだが、彼は既に立ち去ってしまう。

『……何を話していたんだ？』

『ちよっと、頼み事。——それよりも、本当に…ディケイドとして旅をするの？』

『ああ。これは、私がやらなくてはいけないことだ』

そう。

私が自分自身の罪を償うには、これしかない…

桜子は寂しい顔をしながらも、すぐに優しい笑顔を見せてくれた。

『あなたって、頑固なのね』

『悪いか？』

『いいえ。——鳴滝さん、もし…もしもよ。誰かの声が聞きたい

とか、寂しいとか、思った時は……【ネガの世界】に行つて』  
『え？』

『そこに、あなたにとって大切な宝物があるから』

大切な宝物。

この頃の私には、その意味などまったく知らなかった……勿論、今も  
だがな。

私は笑みを零すと、桜子に告げる。

『——お前と、お前の中にいる……私達の子供より、大切な宝がある  
と思うか？』

……私と桜子は、愛し合っていた。

長い月日の付き合いを経て、ようやく、結ばれた。

彼女は妊娠6ヶ月目……服の上からお腹が目立つ時期でもあった。

彼女と、そして子供の存在があるからこそ。

私はなんとしても、自分の使命を果たしたかった。

桜子はそれを分かっていたのか、優しく告げる。

『そうよね……あなたやこの子以上に、大事な存在なんていないわよね』

『……私は必ず帰ってくる。だから桜子は、待っていてくれ』

『ええ……』

しかし、幸せは長くは続かなかった。

——大シヨッカーが、自分達を裏切った結城丈二を連行するべく

…攻め入ってきたのだ。

結城丈二は、私達を逃がすためにあえて自分を囷にした。

桜子は重いお腹を抱えながらも、ディケイドライバー・ディエンドライバーの設計図を持って逃げていた。

私はそんな彼女を守りながら、研究所から脱出しようとした……そんな時だった。

『悪いが、それを渡してもらおうぜ』

目の前に立ちはだかったのは、かつての私

…そう…大首領として大ショッカーに利用されてきた、門矢士だった。

その手には、剣が握られている…

『結城丈二が何を造ろうとしていたのかは知らないが、これは俺達大ショッカーが利用させてもらう』

『や、やめろ！』

『女……それを渡せ』

『…駄目。……これは世界を救うための力！あなた達には、渡せないの……！！』

桜子は、必死で否定し続けた。

私は桜子を守ろうと、生身で挑んだ…

だが貴様は私を蹴り飛ばすと、ジリジリと桜子の元に詰め寄った。

『気が強い、いい女だな。——男がいなければ、俺のものにしてやっただが』

『…ッ。あなたみたいな自分勝手な人は、お断りよ』

『本当にいい女だ。……虫唾が走るほどになッ！！』

やめろ

私は大声で叫んだ。  
だが、

既に剣は桜子の体を…貫通していた。

『——っあ…』

『さ、くら…桜子おおっ！』

『フン。……これか、あいつが作っていた設計図は…』

門矢士はその設計図を拾い上げ、立ち去る。

しかし急に振り返ったかと思うと、

——奴は狂気の笑みを見せながら、刃が身に突き刺さっている状態の桜子を引き裂くように…剣を走らせていた。

『が、あ…！』

『桜子おおっ！！』

『悪いな…俺は気に入ったものほど、壊したくなる。じゃあな』

ははは、と軽く笑いながら…貴様は立ち去っていった。

そして私を嘲笑うかのように、急に雨が降ってくる…

桜子の血も、雨によって流される。

私は、たった一瞬で…また全てを、失った。



そして私は、悲しみを怒りに、桜個へ注いでいた愛情すべてを…貴様に対する憎悪に変えた。

『おのれ、——おのれええええええええええええええええッ!!』

〃  
〃  
〃

「それから私は、貴様に復讐するために…世界を廻った。そして様々なライダーを仲間に取り込み、貴様を追うべく動いていた」

すべての話を聞いた士。

彼は、視線を落としながら…剣崎一真に訊ねる。

「——本当なのか」

「ああ。…だがな、鳴滝！貴様自身の復讐に、この世界を巻き込むな…貴様のしてきたことは、全て！世界を破壊に導く行為だったんだぞ!!」

「黙れ!…：桜子を失ってから、私は…憎しみしかなかった。貴様に対する憎しみ、それだけを糧にしてきたのだ…：ディケイド!!」  
「…大体分かった、」

士は、お決まりのセリフを言い放つ。

だが、その表情は同情でも悲しみでもない……

……怒りだ。

「だがな、……お前は本当に桜子の気持ちを分かっているのか？ 彼女は、自分自身を倒すために世界を危機に陥れろと言ったのか！」

「黙れ！ 貴様に、何が分かる！！」

「確かに、かつての俺のした行為は……お前に恨まれても仕方がないと思っている。だが、お前は憎しみだけで戦うのか？ 復讐の為に俺を倒そうとするのか！？」

「そうだ……それこそ、私自身の願いだ。そして桜子の望んでいる事でもある！」

「———だったら尚更、お前に倒されるわけには行かないぜ」

士は、ディケイドドライバーを構える。

そして、静かに城戸真司・並びに剣崎一真に声をかけていた。

「城戸。お前は行け……剣崎もだ！」

「士……」

「行くのは城戸だけでいい。……俺は、この戦いを見守らせてもらう」

「おい」

「勘違いするな。——俺は、俺達を裏切った鳴滝を憎んでいる。

お前がやられた時のために、控えるだけだ」

「……勝手にしろ。だが、城戸は行け」

剣崎一真の頑固さに頭を抱えつつも、士は城戸真司に釘を刺す。

城戸真司はムスツとした顔をしていたが、自分のすべきことのため……【記憶の海】へと入っていく。

士は静かにカードを取り出し、“門矢士”に言い放つ。

「お前は桜子の願いをでっち上げているだけだ。お前の話を信じ、全てを知った上でお前を愛していた…そんな桜子が、お前に復讐の鬼になれと願う筈がない！」

「もういい！——ディケイド、貴様はここで私が倒す…キバーラ！！」

『もう…人使いが荒いわねえ…。…もう、これっきりよ』

キバーラは限界に近い体に鞭を打ちながら、飛び立つ。

そして自身に残された魔皇力を使い、あるモノを形成した。

…それは、黒く染まった…ディケイドライバー。中央部分の石のようなものは、赤ではなく…青。

キバーラはフフ、と笑いながら…士に言う。

『——ディケイドお、…アタシはあなたに恨みは無いんだけど…  
…鳴滝さんの願いだもの』

「…どうして紅渡を裏切ってまで、手を貸した？」

『いい事教えてあげる。女の過去に、とやかく口出しする男なんて…最低よ？』

「あいつは雇われスパイとして渡り歩く、キバット族だ。…どういうわけか、鳴滝の思想に共感して…力を貸していたようだがな」

『ちよつと、剣崎一真…あんた邪魔するんじゃないわよ……まったく、融通利かない…わね……』

キバーラは剣崎一真に文句を言いつつも、羽を動かすのをやめ、砂の地面に倒れた。

そして、自身も灰のように体が消滅していく…

無理もない。

紅渡との戦闘で疲弊し、その上で“門矢士”に力を注ぎ、彼のため

に残された魔皇力を使って黒いディケイドライバーを作り上げた……  
寿命は、僅かにしか残されていないだろう。

『本当は今回の仕事、凄く楽しかったのよねえ。……栄ちゃんは優しいし、ユウスケだって面白いし……ずっと着いていきたかった気がするわ』

「キバーラ」

『……だけど、アタシはここでリタイア。——地獄から見させてもらうわ……どっちの門矢士が勝って、……そしてこの世界がどうなっていくのか……ね』

それだけ言うと、キバーラは、完全に灰となった。

それが合図だったかののように、2人の士はディケイドライバーにカードを装填した。

士はマゼンタのディケイド。

“門矢士”は、マゼンタカラーを黒に染めた……闇色のディケイド——  
「Darkディケイド」となっていた。

「鳴滝……来い」

「余裕ぶっついていられるのも今の内だ……！ぬおおおおっ！！」

Darkディケイドが、ライドブッカー・ソードモードを振るう。  
ディケイドも同じように、ライドブッカーでそれを受け止めた……  
激しい剣戟。

士は鳴滝と戦うのは、初めてだ。

しかし、その戦いは怒りに身を任せたものでしかない……簡単に言え

ば、荒々しいのだ。

キバGFのように独特な力技でもなければ、キバラーのように美しい剣技でもない。

「どうした…他のライダーに変身しないのか！ディケイド！！」

「……貴様との決着に、他のライダーのカードは要らない。…俺<sup>つかさ</sup>自身との決着は、俺<sup>ディケイド</sup>が着ける！！」

「ほざけええっ！」

「…おおおおっ！」

ガァン、キィン。

剣と剣がぶつかり合う。

しかし、どちらも決定的な一撃を叩き込めないでいる…

剣崎一真は、ただそれを見守っているのみ。

……だが彼は“異変”を察知し、ある方向を睨みつける。

「…この気配…」

“門矢士”もだが、その存在をも許せない剣崎一真は…静かに、歩いていく。

その手に、ブレイバツクルを握り締めながら。

「……鳴滝いいっ！」

「……ディケイドおおっ！」

竜虎、吼える。

ディケイドのライドブツカーの攻撃が、ダークディケイドのディケイドライバー目掛けて放たれる。

それは見事に中心を捉え、剣がダークディケイドの体に貫通する。  
しかし、ダークディケイドは気力だけでライドブッカードを握り締め  
：最後の力を全て、一突きに込めた。

「…ぬおおおっ！」

その一突きは、ディケイドの腹部に突き刺さる。

そしてかつて目の前で恋人がされたように、横に剣を滑らせる…  
互いに深い一撃を貰い、“門矢士”も士も変身が解かれ…倒れて  
いた。

「が、はっ…」

「……チツ、読み誤ったか…」

「…ディケイド…私の勝ち、だ。……貴様はもうじき…死ぬ、これ  
で……桜子も…」

「その、桜子からの伝言だ」

士は、ディケイドライバーにあるカードを装填する。

それは、ケータツチを入手した際…一緒にあった、用途不明のカー  
ド。

彼はカシャン、とそれを起動させると……ディケイドライバーから、  
声が聞こえてきた。

『——鳴滝さん。聞こえる？』

優しい女性の声。

それはまさに、桜子の声そのもの：

“門矢士”は目を見開き、その声に耳を傾けていた。

『これを見つけたってことは、…やっぱり見つけてくれたのね。それとも、剣崎さんが簡単な場所に隠したのかしら』

「さ、く、ら…こ？」

『鳴滝さん。私達のしようとしていることは、きっと…その世界のライダーにとっては恨まれる事だと思うの。そして大ショッカーも、私達の目的を阻止して襲い掛かろうとするわ。だけど、だけどね』

「なん…これ、は…」

「…聞け」

『——私の身に何かあっても、誰かを憎まないで』  
「……！」

桜子の一言に、“門矢士”は愕然とした。

『憎しみは新しい憎しみを生みだす…だから、あなたには誰かを憎んで欲しくない。それが私のため、なんて理由だったら尚更』

「桜…子」

『私は、あなたの力になりたいって思った時から…覚悟はできているの。……あなたは私のいる世界だけじゃない、他の皆の世界を救うために戦うんだから……ね？』

桜子の望み。

それは、ただ、「世界を救え」というだけのものだった。

彼女は自分の家族、そして世界を愛している。

愛しているからこそ、他の世界の者達も…自分の大事な世界を愛している、分かっていた。

“門矢士”にも、世界を愛してもらいたい。

全てを背負い、戦うであろう彼にただ…自分のことではなく、「世

界」の事を心配していたのだった。

『でも、もしお互い無事だったら。一緒に暮らしましょう』

「さ、くら…」

『その時はお腹の子供も、産まれている頃ね。……ねえ鳴滝さん、子供の名前はどうしたい？』

少しばかり空白を置き、

桜子は、

恐らくいつもの優しい笑みを浮かべながら言ったであろう言葉を、伝えた。

『……ディケイドライダーには、各世界のライダーの力を司ツカサっている。世界の力を借りて、戦うあなたの子供だから………【司ツカサ】がいいわね』

司ツカサ

その名前を聞いた“門矢士”は、失笑していた。

…声がかくぐもっている事から、泣いているのだろう…

「は、はは…なんと、いう……。……はは、ははは………」



「知らなければ、私は…心置きなく死ねたものを。おのれ、ディケイド…何処まで、私の…は、ははは…」

士に返事はない。

“門矢士”は、空を見上げながら…ゆっくりと、手を伸ばそうとする。

まるで、そこにいる木野桜子の手を…掴むかのように。

「桜子、私は何処まで…愚かなのだろう…。…今、そっちに…」

ドサ、と力なく手が落ちる。

そして…

辺りには、波の音のみが支配していた。

〃  
〃  
〃

夏海は、必死に士を探していた。

手掛かりは何もない。

ただ、彼女は士に会いたい一心で…走っていた。

「士君…士君……!!」

そして、彼女は辿り着いた。

【記憶の海】がある、砂浜に。

——そこで彼女を待っていたのは……

一人の“士”が、消滅する姿。

そしてただ一人残された、士…

夏海は何も考えず、走り出した。そして、士の体を揺さ振る。

「士君!…士君、起きてください!!」

「……」

「士君…起きないと、笑いのツボですよ!?!…士君…!」

「——そいつは既に死んでいる」

男の声。

やって来たのは、小野寺ユウスケ…

しかしユウスケとは思えない殺気に、夏海は畏怖していた。

「ユ、ユウスケ…?」

「はは、ご苦労様だな。もう既に、小野寺ユウスケは死んでいるのに」

「……ユウスケ、が…？」

「ディケイドは消えた。そして、先刻コイツも潰した…簡単に破壊できないとはいえ、ダメージは蓄積されるみたいだな」

ガシャン、と夏海の近くにある物を放り投げる。

そこにあつたのは、ブレイドの持つ…ブレイバックル。

だが、剣立カズマは既に消滅している。

持ち主を当てはめるなら、——剣崎一真ただ一人だけとなる。

現にそれは、剣崎一真のものらしき…緑の血が付着していた。

簡単にデータが消滅しないはずの彼を倒した、その存在は……鳴滝の言葉を借りるなら、【破壊者】。

「——！！」

「鳴滝もご苦労なことだ。アークルに仕込んだ暴走装置が、まさか…自分の人生を狂わせたモノであるとも気付かずに」

「……暴走装置…？あなたは、一体何なんですか！？」

「教えてやるよ。——俺は無数に広がるライダーの世界…その世界で倒された怪人達の、怨念が集合したもの。……【イレギュラー】、と呼ばれた存在だ」

イレギュラー。

そう名乗った相手は、夏海に近づき…その顔を強引に上に上げる。その笑みは、邪悪そのもの。

「俺の存在は、本来この世界にあってはならないものだった。さっきも言った通り…異世界の怪人達の負の集合体だからな」

「…もしかして…あなたが？あなたが、世界を…」

「ああ、そうだ。——退屈しのぎに世界を分離させた……そして、思ったよりも面白い方向に進んでいったなあ」

そもそも俺が目覚めたのは、大ショッカーの奴らが強い力を手に入るためだった。

俺は丁度、退屈していてな…

面白そうだから、その遊びに付き合ってやったんだよ。

だけど、怪人を生み出すだけじゃつまらなくなった。

だから俺は大ショッカーから逃げ出し、別の場所です…この世界に俺の力を流し込んでいた。

人間は、よくパワースポット…みたいなところにあやかろうだろう？  
この世界にある、【力の強い場所】の中から9つ厳選して…そこに負の気を流し込んだ。

———そうしたら、世界は見事に分離していった。

…世界が切り離されたにもかかわらず、管理者達の記憶操作のお陰で、お前達は危機に畏怖もせず普通に生きてきていた。

そうしたら、また暇を持て余して…

今度は9つの世界に、それぞれ怪物を生んだ。

一つの怪物を産めば、後は勝手に鼠算方式で生まれてくれる。

「で、今度は元の形に戻ろうと9つの世界が融合を始め…俺が弄ってもいないのに、“この世界”には融合化の影響で各世界の怪人が溢れかえった」

「何ですって?!———じゃあ、この世界は…」

「ああ、そうさ。…お前の世界だよ、光夏海」

大きな笑い声を上げる、イレギュラー。  
そしてイレギュラーは、夏海に説明を続けた。

「そしてお前達は旅に出て、永遠にループされる物語の始まりとなった。そして俺は、【邪悪なる力】としてアークルに組み込まれ、その中で世界を見てきた。…いつも微妙に違うから、退屈はしなかったしな」

「そんな…じゃあ、こんな事になったのは全て…！」

「勘違いするなよ。——お前も共犯者だ、光夏海」

「ど、どうして？」

「……ディケイドがライダーを破壊すれば何度も同じことを繰り返さなくて済んだ。だが、それを止めてきたのは光夏海…お前なんだよ」

「———！」

イレギュラーの言葉に、夏海は衝撃を覚える。

自分が、阻止していた？

世界を救うための方法を…

初めて知らされた真実に、夏海は、体中の力が抜けていた。

それを見たイレギュラーは、高笑いをしながら…夏海に言う。

「ははははは…！だけど、今回はかなり最高だ。——ディケイドも、ディエンドも死んだ！管理者達も、殆ど手を出せない状態にある…！…ただ、一人を除いてな」

ザッ、

砂の音が聞こえる。

そこに立って居たのは、唯一肉体データを保っている五代雄介…彼は既にアークルを装着した状態で、イレギュラーを見ていた。

「…イレギュラー、渡達に代わって…俺が討つ。討たなくちゃ、いけなくなった」

「やっと出てきたな。…来い、クウガ」

「変身」

二人の声が揃う。

変身したその姿は、同じアルティメットクウガ…

しかし五代雄介は赤、イレギュラーは黒と瞳の色が対極だった。

「…お前を消せば、邪魔者はいなくなる。この世界は俺のものになる」

「世界を手にして、どうする気だ」

「さあな？その時考えるさ」

「…お前なんか、世界は渡さない。それに、…まだ終わってはいない」

ビュッ！

風を切るような音がしたかと思うと、二人のクウガは殴り合っていた。

黒目クウガが、強力なキックを放つ。

赤目クウガは身を蹲らせるが、すぐにパンチを放つ。

そして、お返しとばかりに人体発火能力を…相手に放った。

「ぐうう…！」

「『終わっていない』？——いいや、もう終わりだ。ディケイドは死んだ、…もう世界は元通りにならない」

「…いいや、終わっていない。…仮面ライダーは、死んではいな

い！」

赤目クウガの蹴りが、相手の頭部を捉えた。

黒目クウガは、鋭い拳の一撃を胸部に叩き込む。

同じ姿での激しい戦い：

夏海は、ただそれを見ていることしかできなかった。

「残っているのは出来損ないのナイトただ一人。奴では俺に敵わない」

「…」

「それに、お前達が最期の悪足掻きとして選んだのは…：そいつの案。だが、リ・イマジネーションが一人生きていたところで…：それもデイクイドとデイクイドライバーが存在しなければ成り立たない！」

「そうかな…。——天道がよく言っていた、…：【この世に悪と不味い飯屋が栄えた例はない】と！<sup>ためし</sup>」

赤目クウガは懇親の力で、相手のアークルを叩き壊す。

アークルを壊され、イレギュラーの変身が…：解ける。

それに、人体発火によるダメージもあったのだろうか…：いや、そもそも“元々限界だったのに酷使したからだろうか”。

彼が使っていた、ユウスケの体も…：カズマ達のように、消滅していた。

「ユウスケッ…！」

「はあ、はあっ…。…：これで、終わった…」

——呆気ない。

こんな呆気ない結末の為に、多くのものが失われた…

五代雄介はそう思いながら、変身を解いていた。

このような結果を、誰が望んだだろうか？  
誰も、望んでいないだろう。そう…誰も…

「……城戸はちゃんとやったか心配だな……。……光、夏海さん？」  
「なん、ですか…」

夏海の顔は、涙で濡れていた。

そういえば、彼女も多くのを失った。

海東大樹、小野寺ユウスケ、そして門矢士…

五代雄介は彼女に同情しつつも、声をかけていた。

「【記憶の海】に来てくれ。詳しい説明は、そこで…」  
「——危ないッ！」  
「え、」

五代雄介の腹部を、ライドブッカー・ソードモードが深く突き刺した。

そして、その存在は剣を勢いよく抜き…五代雄介は倒れる。

いくら最強の戦士とはいえ、変身後をやられたこと…更に戦いのダメージで疲労している所を、一撃。

五代雄介の体も、消滅しようとしていた。

「ああっ…!？」

「…ぐ、う…。……な、ぜ…生きて…いる…!？」



目の前に居たのは、ダークディケイド。

しかし、装着車は既に死んでいる。

考えうることはただ一つ。

——イレギュラーはユウスケの体が消滅する寸前に、その体を棄て、残されていたダークディケイドライダーに乗り移ったのだ。

ディケイドによって破壊された中央部分は、邪悪な黒い石で修復されている。

「お前の強さは、クウガで戦ってきた俺だから分かる。…残念だったな？ 倒しきれなくて」

「イ、レ、ギユ…ラあッ……」

「——じゃあな」

非情な一撃が、五代雄介を襲う。

トドメを刺された彼は、その一撃を食らって完全に消滅した…

夏海は口を押さえ、顔を青ざめながらダークディケイドを見ていた。

「そ、んな…」

「これで、世界は俺のものになった。——まず手始めに、光夏海…貴様を……」

「…ッ！」

「まだ、仮面ライダーは終わっていない！」

突然放たれた、一言。

ダークディケイドは声のする方向を向く。

すると、海の上には一人の男が立っていた：

頭に巻いて居たのは、白い包帯。

それを見たイレギュラーは、鼻で笑い出す。

「貴様か、ナイト……城戸真司」

「違う。…僕は、仮面ライダー龍騎。——辰巳シンジだ」

彼は、包帯を外しながらイレギュラーに言い放つ。

確かに雰囲気も、忙しない城戸真司とは違う。

そして何より、服装がフード付きのウインドブレーカーとパーカーを来たラフな格好。

彼が懐から取り出したのは、龍の意匠が彫られたカードデッキ。

「……ギリギリ間に合ってよかった」

「どこがだ？…貴様の意識が戻ろうが、既に大局は決した……り・イマジネーション一人でどうにかなると思っっているのか」

「僕達は一人じゃない。——世界を越えた、仲間<sup>チーム</sup>がいる！」

「そうだ、共に高めあい、戦う仲間……それは世界が違っても一緒だ！」

「あなたは自分の快樂を得るために、混沌に陥れてきた。…あなた

のような人に、世界は渡せない」

「僕はヒビキさん、そして、師匠の意思を継ぎ……戦います」

「僕は守る。大事な人の夢を、そして、…皆の希望を！」

「お前みたいな奴に世界を纏められたんじゃ、たまったもんじゃないからな」

「大事な人々の思い、願い。それが分からないお前に……負けるわけには行かない」

「……そんなわけだ。クライマックスで行くぜえ！」

剣立カズマ。

ワタル。

アスム。

尾上タクミ。

芦河ショウイチ。

天堂ソウジ。

そして、（何故か変身状態の）電王SFことモモタロス。

消滅したはずの彼らが。

——今、この場に集結したのだ。

復活したり・イマジネーションのライダー達を見た夏海は、呆然と  
していた。

勿論、イレギュラーもだ。

「な、何故…お前達は消滅したはずだ。それが何故！！」

「……さあな」

「知りたかったら、聞けばいいんじゃないのか？」

ショウイチが両手を広げている横で、ソウジは焦らすような言い方を  
する。

しかし、それはすぐに分かることになる…

何故なら…

「——俺は、今度こそ…世界中の皆の笑顔を守る！」

「——少年君。勝手に僕を殺さないでくれるかな？」

「——お前が、黒幕か。お前のせいで散々な目に遭わされたぜ」

ゆつくりと、歩いてくる三人。

その姿を見て、夏海は…歓喜の声を上げた。

もう、死んだと思っていた。

だけど…

彼らはちゃんと、存在している。

涙が、止まらない。

だがそれを拭く事はしない…夏海はただ、その喜びを噛みしめていた。

「ユウスケ、大樹さん、――――土君ッ！」

## 後編（後書き）

真剣な話のはずなのに、ギャグテイスト織り交ざっております。  
これがハルルイズム↑  
ぶっちゃけ、ドッジボールのノリが合ってる気がします。

剣崎がケータッチを貸せ、取ったのは理由があります。

で、捕捉。

ケータッチ入手の際に、士は用途不明のカードも同時に手に入れていて、分からないけど「必要なものなのだろう」と思って持っていました。

戦いには使わなかったぐらいで。

グロの山場。

昔の士は結城さん処刑するぐらいなので、きっと残酷無情だったんだろうなー、と。

そしてキバーラ乙。

アルティメット対決は個人的にも予想外。

さて、次回で大まかな話は終わります。後日談もちよいありますが↑

## 完結（前書き）

完結、と銘打ってますが次回まで続きます↑

## 完結

復活したり・イメージネーションのライダー達。

そして、海東大樹・小野寺ユウスケ・門矢士……

「信じられない」とばかりに、イレギュラーは彼らを見ている。  
今まで余裕だった彼の態度は、一転していた。

「バカな…デイクイドは死に、二度と復活することはなかったはず。  
それが、どうして！」

「さあな。……だが、お前は大きな見落としを二つもしていた」

「見落とし、だと？」

「一つは城戸真司を放置してきたこと。そしてもう一つは……コイツだ」

士が取り出したのは、ケータッチ。

一体それが、どうしたというのか…

そう思っていると、海東が説明する。

「ケータッチは、デイクイドライバー・ディエンドライバーの試作<sup>プロトタイプ</sup>品にして、強化ツールの一つ……だが、それ以外にも大きな役割があった」

「役割、だと？」

“記憶の保持”さ。——ケータッチは、そもそも木野桜子が設



計した『ディケイドライダーの記憶情報を保存するデータ領域』が組み込まれていた：」

「城戸の話だと、同じ事が起こった場合：或いはこの事態を後世に伝えるために作ったそうだ。だから、記憶データの保存要領は二つのドライバの倍以上」

イレギュラーも、次第に意味が分かってきたようだ。

元々、ディケイドが“修復機能”を使い、要であるライダーを情報化することによってその情報を修正・その世界を確立した存在にすることが【システム・ディケイド】。

だがそれは鳴滝の復讐心や、士を思う光夏海の行動、更には様々な事象が重なって延々とループを続けるような事態になっていた：だが、今回は違う。

ディエンドが、ディケイドを倒し“情報逆流”による【巻き戻し】を行わなかった。

これまでのループと大きく食い違った事態：そしてそれによって、城戸真司が本格的に動き出した。

城戸真司は何処かのループにおいて：木野桜子の資料を得、ディケイドライダーに“旅をしている間の記録の保持”ができる事を知った。

しかし、それはあくまで旅の記録のみ：そのライダーとの交流の記憶は、引き継がれない。

しかもその記憶は、ディケイドライダーの装着者自身の記憶でなければリ・イマジネーションは復活できないはずだった。

それに例えデータ修復を行ってリ・イマジネーションのライダー達

を復活させても、【存在の確立】を組み込まなければ結局暫く経ってまた消滅する…

そうならないためにも、消滅或いは死亡しなかったリ・イメージ・ションの存在が必要不可欠…そもそもし・イメージ・ションが一人でも残っていないければ、存在自体がディケイドライダーの装着者の記憶からも完全に消えてしまう。

そこで城戸真司が目を着けたのは、辰巳シンジ。

唯一生き残っている彼が、城戸真司にとっては地獄から地上へと向かうためのクモの糸そのものだった。

ディケイド：門矢士の、“リ・イメージ・ション達の記憶”

ディケイドライダーに保存されていた“旅の記録”

唯一生き残ったり・イメージ・ション・ライダーの“リ・イメージ・ションとしての存在と【異端】として確立されたデータ”

それが、城戸真司：並びに海東大樹が辿り着いた『世界を救うための要素』。

しかし、解せない事があった。

ディケイドは消滅した。

先程の三要素から、二つも抜け落ちた状態…

そこからどうやってリ・イメージ・ションが、そしてディエンド、ディケイドが復活できたのか。

それが分からないから、イレギュラーは動揺していた。

だが、今ようやく分かったのだ。

「貴様、——そいつに移していたのか？…自身の記憶と、旅の記録を……！」

「ああ。だが、これは俺の案じゃない」

「何？」

「かと言って、城戸でもない…あいつにここまで考える頭はないかな」

「じゃあ、誰だと言うんだ！」

それを聞き、士はニヤリと笑う。

そして告げた名前は…

「——お前が倒した、剣崎一真さ」

〃  
〃  
〃

【記憶の海】に向かう前。

剣崎一真は、士と城戸真司に提案を出していた。

それは、ケータッチを使ってライダーを復活する…方法だった。

『ケータッチに俺の旅の記憶と、ディケイドライバーの記憶を移す？』

『ああ。最も、一番正しい言い方は【複製】だろうがな』

『で、でもどうするんだよ』

『…パソコンでUSBメモリ内のフォルダに入っていたデータを、PCのデスクトップに移動すると…メモリにもデスクトップにも同じデータが“複製”という形で残るだろう。それと同じ原理だ』

剣崎一真が言うには、記憶を移すと言ってもディケイドライバーのデータや士の記憶を失くすわけではない。

必要なもののみを、ケータツチの中に複製させるのだ。

桜木の計らいで記憶媒体として優秀な設計となった、ケータツチだからこそできる強引手段だ。

これをディエンドライバーなどでやろうとすると、高確立でイカれるらしい。

『随分詳しいんだな』

『一応、桜子を手伝っていたからな。管理者の中では、遥にそのテのものに強い』

『だけど…なんでそんなことを？』

『鳴滝は本気でディケイドを消そうとしている。…黒幕の存在も考えると、万が一の保健は必要だ』

成程、と城戸真司は手を叩く。

剣崎一真の意見はかなり筋が通っている。

ディケイドが死んではいけない状況。だが、どうしても彼が戦わなければならない状況が…一つだけ、避けられない形で残されている。そして士自身も、彼との決着を望んでいる。

『これなら、お前が動かしているその体さえ残っていれば…仮にディケイドが死んだとしても、ライダーは甦る。ディケイド、ディエ

ンドも同様にだ』

『そうなのか！？よかった…』

『……だが剣崎。お前はどのようにして俺に力を貸そうとしたんだ』

士が、尋ねる。

確かに彼にしてみれば、今まで命を狙ってきていた剣崎一真の今の助言やキバーラ介入後の行動は、心変わりとも取れる行動だった…しかし剣崎一真はケータッチを弄りつつ、話す。

『お前に力を貸すわけじゃない』

『何だと？』

『……俺は鳴滝の行為が許せなかったただけだ。自らの過ち、自らの失態を償うために未来からやって来たと…だがあいつは、結局世界を破壊させることをした』

『それと、俺への怒りがどう関係している』

『…その理由は鳴滝本人から聞け。だが、一つだけ言えるのは…俺は、“門矢士”を許してはいない。それだけだ』

どうして、ここまで頑なに自分を憎むのだろうか。

——その理由は、鳴滝Ⅱ未来の士…ということを知った後で、皮肉にも知ることになったのだが…

この時の士に分かったのは、剣崎一真という男は、仲間の裏切りを酷く嫌う男であるという事だ。

というより、“信じていたものに裏切られる事を嫌う”というべきか。

ケータッチとディケイドライバーを借り、旅の記録を複製していた剣崎一真は…

転送作業中、士に、ある事を言っていた。

その際、城戸真司は少し離れた場所で待っていた。と言うか、剣崎一真の一声で待たされる結果になった、というべきか。

『…ディケイド』

『どうした？』

『城戸は生易しいから、説明していないだろうが…この【すべての世界が融合した状態】で確立をした場合、その後にあるのは“大きな喪失”だ』

『大きな…喪失？』

『……少し、長くなるが…』

そう言って、剣崎一真は士に話した。

すべての世界が融合し、その上で、“世界は一つの存在”だと情報を確立させた場合の事を…

それを聞いた士は、驚いて訊ね返していた。

『……待て、そうなるか…』

『だが、それがあるべき世界の姿なんだ。受け入れるしか、ない』

『…あるべき姿、か…』

『他の奴らには、後で話すことになるだろう。……それでも救うか』

剣崎一真が、念入りに話す。

だが、士は迷いなく…言い放った。

『愚問だな。——俺はもう覚悟を決めた、あいつらも、……きつと受け入れてくれる』

〃  
〃  
〃

「と、いうわけだ」

「全ては剣崎一真の仕組んだ事か…そして、あの時俺に立ち向かってきたのは…貴様と鳴滝の決着をつけるため、だと」

イレギュラーは、拳を握り締める。

しかし、彼はすかさず黒く忌々しいカードを握り締めながら…ダイクディケイドライバーに装填する。

その音声は、ディケイド・ディエンドライバーよりも低く…ノイズがかった音であった。

「……お前らの悪運は褒めてやるよ。だがな、——貴様らより強い管理者どもは全員始末した。…貴様らだけで…どうにかなると思うなああつ！」

『Kaijin Ride All Monster!』

その瞬間、地の底から様々な怪人が出現する。

ン・ガミオ・ゼダ。

ビートルファンガイア。

パラドキサアンデッド。

タイガーオルフェノク。

バッファローロード。

アリゲーターイマジン。

フィロキセラワーム。

牛鬼。

……すべて、9つの世界で倒してきた怪人達だ。

仮面ライダーアビスがいないのは、あくまで“ライダー”であること、そしてパラドキサアンデッドと同一人物だった事が挙げられる。それを見たソウジが、「ほう」と比較的落ち着いた物腰で言う。

「随分と呼んだな」

「…余裕だな…」

「おばあちゃんは言っていた。常に余裕を持って行動を心掛けろと」  
「行動はまだしていないだろ！」

横に居たショウイチがすべてのツツコミを担っている。

ある意味、哀れというべきか…

だが、戦う相手を見定めた士達は…それぞれのベルトを出す。

「——お前の茶番は、お終いだ。…この世界はお前のものには、絶対ならない！何故なら、……俺達がお前を倒すからだ！！」

「くだらんことを…お前は、一体何者だ！」

「通りすがりの、仮面ライダーだ。覚えておけ！……行くぞ、お前ら！！！」

「「「変身ッ！」「」」」

『Kamen Ride DECADE！』

『Kamen Ride D1-END！』

『Turn Up』



『Complate』  
『ガブッ!』

響鬼・カブト・電王・キバ・ディエンド・ディケイド・クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイドの順で、ライダー達が並び、立つ。そして彼らは一斉に走り出し、戦いを開始した…

ライダーVS怪人、という構図の戦闘。

ディケイドとディエンドはイレギュラーを相手に、他のライダー達はそれぞれの怪人と戦っていた。

「たああ!」

「グオオオオ!」

響鬼はクウガ・ディケイドすら圧倒した、牛鬼と戦う。

——彼が自分の世界で戦った牛鬼は、かつての師匠、ヒビキだった…

だが、目の前の相手は違う。

ただ操られているだけの、傀儡人形に過ぎない。

それはキバも同じで、ビートルアンデッド…己の父だったものの姿を借りた偽物に対し、果敢に攻めていた。

「…はあっ!」

『おー、張り切ってるじゃないかワタルう!』

「目の前の敵は、…かつて戦ったあの人じゃない。それに、本物と比べても…」

——本物と比べても、どこか弱い——  
キバがそう言いかけた、その時だった。

Rider  
Kick

音声が響く。

と、同時に：フィロキセラワームが攻撃を受けて、霧散していくのを……どのライダーも見ていた。

倒したのは、仮面ライダーカブト。

「……成程。確かに、以前戦った奴より劣る」

「…おおい！？終わったなら、手伝え！」

「くうす…」

涼しい顔をするカブトに、アギトが叫ぶ。

そして更にその隣では、ファイズがタイガーオルフェノクと戦闘をしている。

それを見たカブトは、迷わずファイズの加勢に行った。

「そっちは叫ぶ元気があるなら大丈夫か。そこの赤いラインの彼、今加勢する」

「あ、ありがとうございます…！」

「ちよっコラアア！待て、こつちを手伝ええええ！」

『アギト……人が神と同格となるなど、許せぬ……』

實際、アギトは危機的狀況。

バッファローロードらアンノウンは、アギトの抹殺を図っている……傀儡とか劣化とか関係なく、その本能は存在しているのだろう。だからこそ、一番辛いわけで。

：しかし、それはン・ガミオ・ゼダと戦闘をするクウガも同じだった。

『ぬおおおお！』

「くっ!？」

クウガ一人ではかなり辛い敵。

本来目覚めるはずがなかったその存在は、かなり手がつけられない…だが。

……そこへ、アリゲーターイマジンと戦闘をしていたはずの電王S Fが、イマジンごと乱入してきた。

「おらおらおら！行くぜ行くぜえ!!」

「モモタロス!？ちよっ…こっちに来るなよ!」

「ゴチャゴチャ煩せえな!俺には敵が増えた所で関係ねえよ!!」

「俺が大問題なんだって!？」

相当の自信家であるのは確かのようにだが、空気を読まないのが難点  
といえは難点。

クウガも、もはや諦めたような様子で…

電王とのタッグで、ン・ガミオ・ゼダ、アリゲーターイマジンを手にしていた。

「……暴れるのはいいけど、俺は攻撃しないでくれよ!？」

「お前もな!」

かなりの混戦状況。

そんな中、ディケイドは一人だけ余っている龍騎を見つける。

——そもそも、アビスがない地点で…龍騎一人分の余裕はある

のだ。

となると、一番余裕のなさそうなライダーの手伝いに行かせるのが普通。

だが、ディケイドはこの中で一番厄介なシ・ガミオ・ゼダと戦うクウガではなく、パラドキサアンデッドを相手に戦うブレイドの手伝いに行かせたのだ。

「おいっ、シンジ！あのカマキリ野郎を狙え！！」

「え？だ、だけど」

「あいつは一応鎌田の正体だ！…それに、ユウスケやアスム達とはともかくカズマは危なっかしい」

「チーズ！そりゃあな…どわっ！？」

『それはないだろ』

そう言おうとしたブレイドだが、パラドキサアンデッドの攻撃を避けきれず直撃してしまう。

とりあえず危なっかしいことは理解したのか、龍騎はブレイドの手伝いに行った。

『STRIKE VENT』

「はああっ！」

「ググ！？」

ストライクベントで呼び出したドラグクローで、龍騎はパンチを放つ。

ブレイドはポカンとしていたようだが、すぐに助けられた事を知り、社会人特有の挨拶をしていた。

その挨拶を受けた龍騎もまた、挨拶で返す。

「あ、…どうも」

「…あ、いえいえ、どうも…」

「社会人の通過儀礼をやっている場合か！ああもう、お前らとりあえず互いの足を引っ張らない程度に仲良く鎌田を倒せ！！」

ディケイドは諦めたような口調で言うと、目の前の相手に向き直る。今は、ディエンドがディエンドライダーを使って他のライダーを召喚する。

召喚したのは、仮面ライダー・ダブル。

「『……さあ、お前の罪を数えろ』」

「士！手伝ってくれないかな」

「ああ！」

『Attack Ride BLAST！』

『Attack Ride SLASH！』

ディエンドが銃による遠距離攻撃を、ディケイドが剣による接近戦を開始した。

ダークディケイドも、負けじとカードを装填する。

『Attack Ride ILLUSION！』

5体の分身に分かれる、ダークディケイド。

そして更に、その分身は“ブラスト”のカードを使用…

だが、それを見切っていたかのようにディエンドはダブルにFRカード、FARカードを使った。

「そう来ると思ったよ。——痛みは一瞬だ」

『Form Ride W-LUNA TRIGGER！』

『Final Attack Ride D-D-D-W！』

「『…トリガーフルバースト！』」

分身から繰り出される弾幕のような銃弾には、軌道の予測が不可能かつ必中性能に長けるルナトリガーが有利。

それを分かっている、ディエンドはダブルを喚<sup>よ</sup>んだのだろう。

ディケイドも、珍しく感心する。

「やるな、海東」

「12ループ前で、ちょっとした手違いから君と僕が争う結果になってね。あいつの行動は…その際、君が使った戦法さ」

「…死に損ないは、大人しく死んでいればよかったものを…今、後悔させてやる」

『Final Kamen Ride D—D—D E C A D E』

ダークディケイドが、特殊なカードを装填する。

すると…

クウガ達が今まで相手をしていた怪人達は、すべてダークディケイドに取り込まれるように戻っていく。

そして、ダークディケイドの胸部に怪人達のカードが描かれたヒストリーオーメントが発生…

…ダークディケイド・コンプリートフォーム…

ダークディケイドCFは、手始めにダブルLTに対し三日月形の鎌のようなオーラを飛ばす。

アレはパラドキサアンデッドの技。

ルナトリガーはそれをかわすが、続けざまに浴びせられたパンチの一撃で消滅してしまう。

「おいおい…マジかよ……」

「…もはやなんでもアリのようなだね」

「ふんっ！」

ダークディケイドCFは、ン・ガミオ・ゼダの持つ念動力を放つ。急に体が重くなったかのように、ディケイドは、ライダー達は地面に倒れ伏す。

勿論、一般人である夏海にも…戦いの場から離れていたにもかかわらず、かなりの圧力を掛けられてしまう。

「ううっ…？…士君、皆さん！」

「…ぐ…体、が……」

「くうっ…」

「そうやって地面に這っているのがお似合いだ。——死に損ないの、屑共が！」

「があっ！」

ダークディケイドは、地面に倒れているディケイドの腹部を蹴りつける。

そして、彼の胸に足を乗せると、そのまま全体重をかける…

「ぐうう…！」

「屑がいくら集まった所で、屑でしかない。——諦めろ」

「生憎、だがっ…屑は屑なりの戦い方があるんだよ！それに、…真の屑は……貴様だ」

「何…？」

「お前は自分一人の為に、世界を手に入れようとしている。——だがな、俺達は…世界中の人々の笑顔を、大事な居場所を、仲間を、家族を守るために戦っている。間違っても犯すが、それでも自分の意志を貫き通し、正しき力を以って戦う！……それが…俺達、仮面ラ

イダーだ!!」

ディケイドの言葉を聞き、ディエンドがすかさずダークディケイドCFの脚に銃弾を放つ。

脚に攻撃を受けたダークディケイドCFは、大きくよろめく…それと同時に念動力も解けたようで、ディエンド・クウガがディケイドの肩を支えながら立ち上がる。

他のライダー達も、近くににいるもの同士協力して立ち上がる。

「…そう。そして、二度とこんな間違いが起こらないために…：僕らはここで、全てに決着をつける」

「約束したんだ。世界中の人々の笑顔の為に戦うって、だから、俺は…お前のような奴には負けない!」

「…：人として、ファンガイアとして、…僕は戦う」

「僕は、信じるよ。…：士達が導く道が、【破壊された未来】じゃない…みんなが元通り、平和で暮らす世界であることを!」

「協力することの大切さ、…チーズのお陰で再確認する事ができたから」

「…：守りたい。由里ちゃんの、士さんの、…：皆の夢を!」

「間違いだらけの世の中だが、———ここらで…それをひっくり返すのも面白そうだな」

「おうよ! クライマックスは、まだまだこれからだぜえ!!」

「…人にはそれぞれ、帰るべき場所がある。その居場所を守るために、…：戦おう」

「ヒビキさんの意志を、魂を、…そして音撃道の未来を背負う立場として! 悪しき存在であるあなたに、負けない!」

『その言葉に偽りはないな』



突然、声が響く。

はつきりと聞こえる、その声：

それは、——剣崎一真の声だった。

「剣崎…!？」

「えっ、どこ!？」

『お前達のすぐ近くにいます。——他の管理者達もだ』

『ディケイド、ケータッチを。…今から僕達の力を全て、ケータッチの中に注ぎます』

「その声、…紅渡もいるのか…」

辺りを見回すディケイドとクウガをよそに、ディエンドが冷静に呟く。

肉体データが消滅した彼らは、そのデータの復活にはまだ時間が掛かるらしい…

だが、彼らが今こうしてディケイド達の傍ににいるのにはワケがある。

『そして僕達の力を、ケータッチのパネルを触れて解放してください』

『俺達管理者が持つ、最高の力…お前達に貸してやる』

『ですが、これは諸刃の剣…』

『流星に俺達全員の力を注いだら、その機械の容量を超えるかもなあ』

『…しかも、変身時間もそんなにもたないだろうな』

『だけど…奴に勝つには、もうこれしかないのも事実なんだ…』

野上良太郎、天道総司、津上翔一、日高<sup>ヒレキ</sup>仁志、乾巧、五代雄介が告

げる。

確かに、五代雄介の言う通り：凶悪的な力を持ったダークディケイドCFには、管理者たちの力を借りるしかない。

だが、その代償は：木野桜子の作った、ケータツチの破損。

一人の男を愛し、世界を愛した、一人の研究者の存在の証明：

——しかし、ディケイドは迷わなかった。

桜子の想いは、長いループを経て鳴滝の、そして自分達の心の中に届いた。

……むしろ【躊躇】や【迷い】こそが、彼女の思いへの冒涇に他ならない。

「世界を救ってナンボだ。：頼む！」

『つしゃあ！……行くぜ、皆！！』

『お前が仕切るな』

『いいじゃないですか、剣崎さん。：功労者は城戸さんです』

『まあ、たまにはよしとするか』

『ですね♪』

城戸真司、剣崎一真、紅渡、天道総司、津上翔一が話している。

そして、彼らはケータツチの中に管理者としての力を注ぐ：

それを証明するかのように、ケータツチの中に描かれたライダーの紋章が、赤ではなく金色に輝いていた。

ディケイドは金の紋章を指でなぞるようにタッチしながら、最終的に自分のマークをタッチする。

『KUGA, AGITO, RYUKI, FAIZ, BLADE,  
HIBIKI, KABUTO, DEN-O, KIVA : Final  
Kamen Ride』

クウガは金色の鎧を身に纏い、アギトはそれとは対照的に銀の鎧を纏う。

龍騎は舞い上がる炎のような鎧が発生し、ファイズは黒のボディが赤へと変化、ブレイドは重厚なる王の鎧を身につける。

響鬼はまるで紅蓮のような赤の体となり、カブトは角が大きく広がり装甲も赤と銀メインとなる。

電王は5つのイマジンの力を合わせたいわゆる“てんこ盛り”状態で、キバは金色の鎧と鮮血のマントを纏う皇帝へと変身：

そんな彼らを率いるように出現したのは、それぞれの強化形態カードをヒストリーオーメントに展開した……ディケイド・コンプリートフォーム。

士は、これまでのコンプリートフォームとは違う……漠然とした何かを感じ取っていた。

管理者達の力だけではない。

——どこか、温かいのだ——

あえて例えるのなら、母に抱かれる温もりのような……  
いっそ、安らぎすら感じる。

「強化したぐらいで、いい気になるな……！」

ダークディケイドCFは、近くに居たクウガ・ライジングアルティメットに攻撃を仕掛ける。

だが、クウガ・ライジングアルティメットはその拳を軽く止めると、  
——そのまま赤子の手を捻るようにして相手を地面に叩きつけた。  
想定外すぎる力。

それに驚いていたダークディケイドCFであったが、すぐさま次の攻撃がキバ・エンペラーフォームと装甲響鬼から放たれる。

「――行きますよ、アスム！」

「はいっ！」

「……はあああっ！」

立ち上がろうとしたダークディケイドCFに、二つの刃が襲い掛かる。

二つの攻撃は何かかわしたが、次に放たれたアギト・シャイニングフォームとカブト・ハイパーフォームの連携キックは避けられなかった。

「「はあっ！」」

「ぐうっ……!? 何だ、この力は……これが、管理者達の持つ“最高の力”……!?!」

「――それだけじゃないぜ！」

「これは、お前の身勝手に巻き込まれた人々の……」

「……【想い】の力だッ！」

電王・超クライマックスフォーム、ファイズ・ブラスタフォーム、ブレイド・キングフォームがそれぞれの剣で相手を切り払う。

特にブレイドKFの一撃を受け、ダークディケイドCFは大きく吹っ飛ばされる……

だが、その着地点を正確に狙ったかのように龍騎・サバイブがシュートベントを発動。

烈火龍ドラグランザーが、火球攻撃を行った。

『SHOOT VENT』

「ぐああっ!?!」

「――今だ、ディエンド! 士! !」

「分かっている！」

「…これで、終わりだ!」

『Final Attack Ride D—D—D E C A D  
E!』

『Final Attack Ride D—D—D I E N D  
!』

龍騎SVに続く形で、ディケイドCFが、ディエンドが最強の攻撃を放つ。

ディエンドは膨大なエネルギーをディエンドライバーから撃ち出し、ディケイドは上空に発生したライダーの紋章を突き破りながら…通常のディメンションキックよりも強力な蹴りを、ダークディケイドCFに放った。

「…………ぐあああああーッ!？」

ダークディケイドが、爆散する。

これで、終わるか…?

そう思いながら、ディケイドCFは今もなお燃え上がる炎を見ていた。

…すると、ケータッチが完全に破壊され…ディケイドに戻ってしまふ。

それに合わせて、他のライダー達も元の姿に戻ってしまった。

無理もない。そもそもケータッチには、ディケイドライバーの旅の記録や、士自身の記憶が入っていた。

恐らくかなりの情報量だったのだろう…流石に、ケータッチにも限

界があつたようだ。

「――確かに、諸刃の剣だな」

「これで、終わってくれればいいんだけどね……」

「……土君!」

夏海が、駆け寄る。

彼女はディケイドのところへやってくると、涙を流しながら言い放っていた。

「……心配かけさせないでください!……本当に、死んじゃったかと  
……思っ……」

「夏海。……こりゃあ、明日は大雨か?」

「な、なんですか!人がせっかく心配して……」

「まあまあ、夏海ちゃん!落ち着いてっ」

「まったく。進展がないね、君達は」

夏海とディケイドのケンカを、クウガとディエンドが止める。

そんな様子を見て、苦笑する他のライダー達……

しかし、アギトは寒気に近い何かを感じたのか背後を振り返る。

――が、背後に居たのは響鬼とキバと電王。

気のせいかと思い、彼は流していた。

「大体お前はな、ナツミカン!」

「夏海です!……笑いのツボ、行きますよ!?」

「おいっ、それは流石にやめろ!」

「土も成長しろって……」

「本当に。苦労するなあ、僕も」

「俺への労いはなしかよ!?」

「——おかしい、」

カブトが、呟く。

ディケイド達の平和的会話が、その一言で、止まった。  
何がどうおかしいのか。

そう思っていると、カブトはディケイド達に言い放った。

「あんなもの、今まで空にあったか？」

「「空？」」」

「丁度、その金色の……真上だ」

金色の、真上。

この中で金色は、グランドフォームのアギトしかない。  
全員彼の遥か上空を、見上げ……絶句した。

まるで、巨大な鉄の百足のようにも見える……機械要塞が、そこにあった。

しかもそれは、今まさに、アギトのいる場所に突っ込もうとしている……

アギト、そしてライダー達は慌ててその場所から離れる。

「「「うわあああーっ!？」」」

辛うじて、全員無事だった。

巨大な要塞はゆっくりと進んできた方向と逆の方向へとバックし…  
ディケイド達を、見据える。

それは、——イレギュラーの声であった。

『ツブス…ツブス、…：キサマラハ…ココデ…：ツブス！』

「おいおい、あんなのありかよ…」

「本当に、なんでもありなのか。参ったねえ…」

「どうするんだよ、士！…：もうケータツチも壊れたっていうのに…」

「安心しろ。最後の手段がある」

“最後の手段”

それを聞いたクウガ達は、一体何なのかと戸惑う…  
だが、ディケイドは躊躇いなく一枚のカードを装填した。

『Final Form Ride ALL R—R—R—Ride  
er！』

その瞬間。

クウガ達は自分の意志とは関係なく、FFRしてしまう。

クウガゴウラムが、デンオウモモタロスが、ディケイドに叫んだ。

<おい、士！？>

「いきなり何するんだっての！？」

「これが最後の手段だ。——今度は俺達しかできない、俺達だけの力での芋虫を…：ぶっ飛ばす」

<<うおおいッ！？>>



叫んだのは、ブレイドブレードとリュウキドラグレッダー。

しかし、ディケイドは無視して勝手に話を進める。

その際、ディエンドにファイズブラスターとアギトトルネイダーを渡して。

「海東！お前は、タクミとショウイチを使え。俺はカズマとユウスケを使う」

<ちょ、ちょっと！人を物みたいに扱わないでくださいよ！？……

今、物同然ですけど>

<…本気で怒るぞ？>

「いいけど、キバアローはどうする気だい？」

「だったな…おいモモタロス！お前、アスムの上に乗れ。それかアスムがモモタロスを掴め」

<…アスム…僕、生きて帰ってきたらまず士さんのライフエナジーを吸います…>

<死なない程度に吸ってくださいね>

「つか、あの龍じゃだめなのかよ！？おい！」

デンオウモモタロスは文句を言うが、その前にキバアローを渡され、泣く泣く応戦する結果に。

だが、リュウキドラグレッダーに乗って不都合があるわけでもない。が、——リュウキドラグレッダーはFFRでは一番大型。

大型には大型なりの、戦闘があるのだ。デンオウモモタロスの移動用になっている余裕はない。

「海東、モモタロス、脆そうな場所を一点集中で行くぞ！…シンジとソウジは、敵をこっちに向けさせるな！！」

<つまり囿になれ、と>

<仕方がない。だが、士。何処を狙う>

「それは…あそこだ」



『Final Attack Ride B—B—B L A D E  
!』

ディエンドフォトン・デンオウフアング・ディケイドエッジ…  
三つの必殺技が、要塞のヒビ割れた部分のど真ん中を捉える。  
それが決定打だったのか、今度こそ完全に要塞は…イレギュラーは、  
崩れ去っていった。

『……忘れるな…ライダーいる限り、俺は消えない……俺はまた、  
いつか…再び舞い戻る………!』

〃  
〃  
〃

地上に降りたディケイド達は、変身を解除する。  
これで、ようやく終わった…

——しかしこれで全てが終わったわけではない。  
まだ、9つの世界は融合から回復していないのだ。

「さて、と。……BOARD、どうすっかなあ…」

「ATASHIジャーナルって、どうなったんだろう…」

「城戸の話だと、シンジが寝ていた病院は残っているみたいだが」

「その一部分だけだろ？はあ…レンさん、編集長……」

「アイマイミーさん…サクヤ先輩……あと、ついでにムツキ…」

シンジとカズマ  
就職コンビが、激しく落ち込んでいる。

確かに…再生されたのは、リ・イマジネーションのライダーのみ。  
それ以外の人々や、世界が再生されたわけではない。

そんな時だった。

明るい茶色の髪に、スカイブルーのダウンジャケットを着た男が現れたのは。

その服装を見た士は、「あ」と声を上げる。

「お前、まさか…城戸真司か？」

「正解。——他の皆は、まだちょっとデータ修復に時間が掛かってるかな。肉体データが復活したのは、俺だけなんだ」

「城戸さん…ATASHIジャーナルはどうなるんですかあ……」

「俺の仕事先とか、後、他の皆の世界とかは…」

暗い顔で落ち込んだままの社会人2人。

城戸真司は二人の気持ちに分からなくもないのか、声をかけた。

「大丈夫だって。皆の記憶を元に、この世界の中に存在を確立させるから」

「できるんですか…？」

「全部の世界が融合しちゃってるんだぞ？」

「ブレイドの世界も龍騎の世界も、他の世界も…元を正せば、今いる世界の一部だったんだ。それが、元の形に戻るだけなんだよ」

その言葉に、シンジやカズマだけではない…他のライダー達も喜んでいて。

城戸真司によれば、リ・イマジネーションの彼らの記憶データを使えば、今いる世界…“夏海の世界”に融合した状態でも復活が可能。というより、世界が分かれる前に戻るだけの話だ。

だが…

素朴な疑問を、タクミが告げた。

「だけど、世界を融合させた状態で戻したら…その世界特有の怪人達も入り乱れた世界になるんじゃないですか？」

「大丈夫。怪人は復活しない…この世界にとってのイレギュラー全てが、存在しなくなるんだ」

「…待て、それだと…その対象には」

「ああ。ナツキンカンの世界には、そもそもライダーは存在していなかったんだろう？だとすると…」

「——流石に気付く奴もいたか」

ソウジとショウイチの後に続くように、一足先に復活した剣崎一真が…告げる。

城戸真司は、驚いたように彼に言った。

「剣崎！お前、カズマと会っていいんだっけ」

「お前も辰巳と顔を合わせているだろう」

「あ、そっか…」

「……ちよっと待ってくれよ。どういふことなんだ？ショウイチさ

んの言葉が本当なら、——仮面ライダーもいなくなるってことなのか!？」

納得する城戸真司を押しつけ、ユウスケが剣崎一真に尋ねた。

剣崎一真は、隠しもせず、頷く。

それを聞いた瞬間、この場に居たほぼ全員に……動揺が走った。

「そうだ」

「「「…!？」」」

「だが、リ・イマジネーションであるお前達がまた消えるわけじゃない。……母体とも言える、この世界と融合した状態で世界が確立してしまった場合、子である9つの世界からライダーも怪人もいなくなる。それだけの話だ」

「それだけ、って…」

「本来なら【システム・ディケイド】で、9つの世界はそれぞれ確立されるはずだった。……しかし…【システム・ディケイド】は失敗した。正しい順番での修復が成されなかったのだからな」

剣崎一真の話によれば…

元々どの世界にも、怪人やライダーは存在しなかった。

イレギュラーが怪人を生み出し、それに対抗するためのライダーが作られるまでは。

それに、ユウスケ達の記憶を元に“夏海の世界”を9つの世界も混じった“本来の世界”に戻した、と同時に……ライダーの存在は、抹消される。

つまり記憶や形にも、残らなくなるのだ。それはディケイド・ディエンドとして例外ではない。

「――それに伴い、俺達管理者と関わった記憶も抹消させてもらう。ライダーのことも世界の消滅の事も、知る人間は誰一人としていなくなる…」

「……ある意味、バッドエンドってところかな」

「いいや。…これも一つのグッドエンドだ。――何十、何百と繰り返されてきた連鎖<sup>ループ</sup>に、ようやく終止符が打てたんだからな」

海東の言葉に、士はそう言う。

そして、彼は「それに」と夏海やユウスケ、カズマ達を見回す…その後で、士は剣崎一真・城戸真司両名に言い放った。

「……俺の、俺達の物語はこれで終わりじゃない。これからが、始まりなんだ」

「…そうか」

「お前はもう決めたんだな。…ユウスケ達も、…いいかな」

城戸真司の言葉に、ユウスケ達も頷く。

彼らも分かっていたのだ。

ライダーの力に固執すれば、自分達の世界の大切な人々は戻ってこない。

それに、…不思議とそれを手放す事に後悔はなかったのだ。

全員、それを受け入れていた。

「――それじゃあ、やりますか!」

「ああ。…今日が世界の、復活の日だ」

〃  
〃  
〃

某所。

光栄次郎は、カメラの手入れをしながら…窓を開ける。  
空気の入れ替えの意味もあったが、——もう二度と帰らない…キ  
バーラを迎え入れるためでもある。

「夏海達は、大丈夫だろうか………んん？」

栄次郎は、目を疑った。

この世界に着いたときには、殆ど荒野しかなかった…  
だが、今は違う。

栄次郎の目の前には、元々いた自分達の世界の光景が映っていたの  
だ。

それだけではない…

遠くを見れば、どこかで見たような高い建物も見える。——あれ  
は、ブレイドの世界にあるはずの、BOARD本社だ。

「こ、これは…」

他にも、今まで高層マンションが立ち並んでいた場所には…大きな  
山が。

更にその少し手前には、新しく建てられたかのような学校がある。  
そう。

——今まで見てきた世界の光景が、一つ…一つ…  
一つ…一つ…



「…これが、“本当の世界”だったのか……！」

そう言った、その時だった。

栄次郎の中に、すべての記憶がすっと抜け落ちたかのように無くなる。

だが、無くなったのは…ライダーと怪人、そしてこれまでの旅の記憶だった。

栄次郎は首を傾げながら、「はて？」と困り顔を見せる。

「…なんだったかな？……ああ、そうだ、夕飯の仕度仕度…」

ガララ、と栄次郎は開けたばかりの窓を閉める。

そして食卓に行ったかと思えば、彼は夕飯の準備を始めていたのであった…

## 完結（後書き）

二勢力より、単独行動の城戸のほうが成果を上げた件について↑  
まあ、城戸一人じゃ無理だったって言うのもありますが。  
むしろ途中から剣崎が協力しなかったら無理だったと思うこれ。

剣崎さんは本編でBOARDに居たので、一応広瀬さんほどじゃないけどもある程度機械が弄れそうなイメージ。  
一応、設定上じゃ文武両道らしいですからね！

リイマジが復活したら、ディケブラ・ドッジと大差なくなってきたなあ…

特にソウジとショウイチ。

こいつらはボケとツツコミのバランスがいいなあ……

あらWも登場。

でも、例の如く中の人は翔太郎でもフィリップでもないよ！  
それっぽい他人（？）です。

強化フォームの魅せ方が…駄目すぎる……orz

オールララライダーは、ネタバレ画像の図をある程度参考にしました。

と言っても、キバアローとファイズブラスターとブレイドブレードが存在している事だけです。

図だったらアスムの方が、と思いますけどヒビキアカネタカはマスカレイドがテラーに逆らうほど無謀な事（と言うか、単体でぶつかっ

でもスーパークライス要塞に対して威力がなさそう) ですので。それだったら、ある程度空中の機動性に長けていて…尚且つ体当たりでも威力があり、敵の攻撃をある程度避けられる者…:…ということとで、カブトゼクターに白羽の矢が当たりました。ソウジさん凄い人だよ。

さて、次回が本当の最終回。  
リイマジは？管理者は？ディケイドは？  
一体どうなるのでしょうかね。

## 後書

「世界は無事、修復されたようですね」

紅渡が、剣崎一真にそう告げる。

剣崎一真は、ああ、と短く返事をしつつ：【管理者の世界】から世界の様子を見ていた。

管理者の世界とは、人の目に一生触れることがない、特殊な空間：記憶の海の果て、だ。

「———そのような」

「正直、城戸さんの勝ち…でしたね」

「『勝ち』？……俺達は、何かの競争でもしていたか」

「……すみません。失言でした」

「まあいい。———それより…ディケイド達はあの後、どうしている」

剣崎一真に訊ねられ、紅渡は少し間を空けてから返答する。

「リ・イマジネーション達の記憶で、それぞれの記憶データを使って再生させた以降は…ライダーの記憶全てが抹消されました」

「そうか」

「そして、…ここからが本題です。剣崎さん」

「……なんだ」

「僕達管理者も、元々【9つの世界にライダーが生まれたことによ

り、その世界を安定させるために作られた存在】…そして、イレギュラーが生み出した怪人に対抗するべく…各世界に応じたライダーシステムを作り上げました。ですが、世界は融合した状態で確立され…」

「俺達も、——世界同様一つに集約されるということか」

コクリ、と紅渡は頷く。

…そもそも、彼らとて本来生まれるはずがない存在であった。

世界が元々一つだったように、彼らもまた、一つの存在だった。

しかし世界が分かれ、9つの世界にそれぞれの世界を管理する“管理者”が生まれた。

そして今、世界が融合し…更に10の世界の全てが混在し確立したこの世界において、9人も管理者は要らないのだ。

彼らもまた、世界同様、一つに戻る必要がある。

「…管理者として一番強い力を持つのは、アーカイブが一番近い前だ。お前が残り、俺達が消えるだけの話だ」

「そのことですが、……少し手違いがありまして」

「何？」

「———というわけだか知りませんが、アーカイブが…その、…僕達管理者を“異端”として確立してしまったようで、管理者としての記憶と力が失われるだけで…“この世界”に存在できるようになってしまったのです」

「……………は？」

剣崎一真は、頭の中で、紅渡の言葉を簡潔に纏めた。

———自分達は、本当は一つに戻らなければいけない存在だった。

——だが、紅渡の言う『手違い』のせいで：この世界の住人として確立してしまった。

そうなった原因に、心当たりがある。

剣崎一真は猛スピードでダッシュすると、偶然通りがかった城戸真司にラリアットを浴びせていた。

「貴様か城戸おおお！？」

「ぎゃーっ！？」

バガン、と重い音が鳴る。

しかし城戸真司は空中で3回転しながら、綺麗な着地をする：そして、そのままいきなり襲い掛かって来た剣崎一真に文句を言っていた。

「あつぶねえ：！何すんだよ！？」

「お前しかいない。——アーカイブのデータを弄って、俺達の存在を確立させ、生き長らえさせるような阿呆な事をするのは：！」

「何のことだよ！？」

「この期に及んでまだ恍けるか：！」

「……剣崎さん。城戸さんには、そこまで考える頭はありません：一番分かっているのは、腐れ縁であるあなただけでしょう」

紅渡が、なかなか酷い事を言い放つ。

しかし剣崎一真には、城戸真司以外の犯人など思いつかないようだ：そんな時だった。

五代雄介が、苦笑しながらやって来たのは。

「はは、これが“管理者としての俺達”にとっての見収めになると思うと、寂しい気もするかな」

「五代」

「折角の交流を邪魔するようで悪いけど、それ、俺なんだ」

「「は」」

城戸真司・剣崎一真がポカンと口を開ける。

それはそうだ。

剣崎一真は、城戸真司のせいだと思ってラリアットを浴びせた。

逆に城戸真司も、彼がそう思ったからこそ殴られた。

…呑気に笑って済ませられる状況では、無かった。

「……五代、理由を3秒以内に答えろ。返答によっては生命の輪廻から外す」

「どういふことっすか!？」

「ちよつと、ね。…このままでいいのかなあ、って考えて」

「「「?」」」

「——このまま、この世界の行方を自分達の目で見守れないまま……っていうのは、どうかと思ったんだ。一つに戻るだけとか、一つになっても世界を見守ることは変わらないとか、そう言われたらおしまいだけど……だけどこのまま元のように一つになったら、悲しいと思ったんだ」

五代は、中立の立場から見えて……

世界を救いたい志は一緒だが、考え方が真っ向から違う剣崎一真・紅渡。

剣崎と共にデイケイドを倒す、と誓った……不器用だが優しい乾巧、明らかにデイケイドⅡ門矢士の影響が大きい（いや、むしろ彼の影響あってあんな“門矢士”になったのだろうか）天道総司。

自分一人で背負おうとする紅渡を気遣い、協力した日高仁志Ⅱヒビキ・津上翔一・野上良太郎。

そんな二勢力のどれにも属さなかった、自分と同じ中立だが自ら行

動を起こした城戸真司。

：そして、中立として見守る事を決めた五代雄介<sup>じぶん</sup>：

元は同じ一つの存在とは思えないほどの、個性的な彼ら。

だが、このまま一つに戻ってしまえば：その【個性】も失われてしまう。

そうなれば：剣崎一真という存在や、城戸真司という存在、更に紅渡らの存在は：“ない”に等しい。

その結論に至った五代雄介は、ユウスケの体を操って暴走するイレギュラーとの決戦前に、自分達管理者の存在を改変させたのだ。

「——お前も馬鹿だな。：結局互いの事もすべて忘れるというのに、意味のないことを」

「意味はないだろうけど、だけど、世界の様子を見てきて分かった事が一つだけある。：：：どんな困難に陥っても、精一杯生きようとする彼らが、愛おしく感じた」

「五代さん」

「：俺らも、あんな風に生きようよ。勿論、人間として扱われるから：有限の命なんだろうけど、その限られた命で精一杯生きている人達と一緒に、生きてみようよ」

「：：：五代さん、ですが、他は：」

紅渡がそう言った、その時だった。

乾巧が、天道総司が、更に野上良太郎、津上翔一、ヒビキも：一度に集まり、紅渡達に言う。

「：いい加減ただ見ているだけ、っていうのにも飽きてきたからな。：：：俺はそのつもりなんだが」

「おばあちゃんは言っていた。天の道を行き、総てを司れと：：その



言葉通り、俺は俺の道を行く」

「皆と一緒に居た記憶はなくなるけど、だけど、…忘れてもまた一緒にいられます。きっと」

「俺も良太郎君と同じ意見です。ですよね、ヒビキさん？」

「そうだな。それに、雄介君の意見…：この世界で生きる人々が愛おしい、そんな彼らと共に生きたい…：素敵なことだと思うな」

「…：能天気な奴らばかりだ」

「いーじゃんかよ！…：またこうして、馬鹿やれるんだから！！」

「馬鹿を仕出かすのは城戸さんだけじゃないですか。…：五代さん、僕達の記憶は…：あとのぐらゐまで保ちますか？」

「――1分かな。記憶が消えれば、自動的にこの世界からも弾き出される…：そしてその後は、…：分からない」

分からない

五代雄介の返答は、これ以上にならないぐらい最高の例えだった。

管理者としての記憶を忘れる以上、どうなるのかなど、予想もつかない。

津上翔一は、ポン、と手を叩くと…：「じゃあ」と笑顔で告げた。

「最後に皆で、挨拶しましょう！」

「「は？」」「」

「ですから、俺達がまた会えるように…：『また会いましょう』って言うんです！そうしたら、忘れてもきっと、会えるような気がするんです！！」

「…：…：馬鹿らしい…：けど、…：いいな。それ」

呆れる乾巧だったが、意外と乗り気のようにうだ。  
他の管理者達からも、反対意見は出なかった。  
そして…

彼らは口々に、“再会のための挨拶”を……残した。

「——じゃあ、またどこかで！」

サムズアップをしながら、五代雄介は言う。

「はい！今度会う時は、俺の手料理をご馳走しますよ！！」

太陽のような笑顔で、津上翔一は約束する。

「また、一緒に何かするのも面白そうだな…戦い以外で。……その時は、楽しくやろうぜ！」

やはり最後まで戦いを否定しつつも、明るく城戸真司は言った。

「……じゃあ、また」

ぶっきらぼうに言い放つ乾巧。

「…また会う時までには、人付き合いの悪さは、何とかして……いるかもしれない」

乾巧以上の不器用さを、意外と気にしていたようであった…剣崎一真。

「ああ！また会おうな、皆！！」

シュツ、と決めながらヒビキはそう言う。

「また、こうやって会えますよね」

野上良太郎は、微笑を浮かべながら呟く。

「——ええ、また……」

紅渡が、野上良太郎に釣られて微笑を浮かべた。  
そして…

アーカイブの中は、白い光に包まれる。

そして、光が収まった後：残って居たのは、虚無。

今までそこに居た管理者達は、すべて、——ここからいなくなっていた。

〃  
〃  
〃

世界が融合し、一年の月日経った。

光写真館。

ドタバタと、騒がしい足音が聞こえてくる。

誰かが、階段を上がってくるような…

カメラのレンズを磨いていた光栄次郎は、「一体どうしたんだ」と  
思いつつもその人物を待った。

やって来たのは、孫娘の夏海だ。

「——おじいちゃん！」

「おお、夏海。どうしたんだい、そんなに慌てて」

「…これ、見てください！」

バン！と机に叩きつけたのは、家計簿。

そして、『修理代』だの『コーヒー代』だのこまめに書き留められ  
た…何かの紙も。

夏海は悲観しながら、栄次郎にきつく言う。

「もう、おじいちゃんも言うてください！いい加減、ツケを払えつ  
て！！」

「そうは言うけどねえ…一応、この店の大事な跡継ぎだし。私も老  
い先短いからねえ…」

「誰が跡継ぎですかっ！？ああ、もう、自分で催促してきます！」

夏海はそう言うと、大量の紙と家計簿を持って外に出て行く。

栄次郎は、そんな彼女を見送りながら

「夕飯までには帰って来るんだよ」

…と、呑気に言っていた。

更に彼は、そのまま再びカメラのレンズを磨き始めている。

どうやらこの光景は【日常茶飯事】のようで、慣れてしまったよう  
だ。

〃  
〃  
〃

夏海がやって来たのは、写真館からすぐ近くの…カレー屋“ポレポ  
レ”。

勢いよく店の扉を開けると、店主らしき男が驚いたような顔で訊ね  
ていた。

——五代雄介——

かつての管理者の、一人だ。

今はその記憶を消され、カレー屋を営んでいる……もう一人のユウスケと共に。

「いらっしゃい、光ちゃん」

「どうしたんだ？ 夏海ちゃん？？」

「……五代さん、ユウスケ、彼……ここに来ませんでしたか！？」

グロンギ顔負けの表情をする夏海に、五代もユウスケも怯んでしまふ。

だが……

五代は滝のような汗を掻きながらも、夏海の問いに答えた。

「えっと、——今日はまだ見ていないな……」

「分かりました。失礼します。……あ、あとユウスケお借りしてもいいですか？」

「えーっ!？」

「ああ、いいよ。どうせ今、明日のための仕込み中だし……」

五代は苦笑いをしつつも、ユウスケを快く送り出した。

ポレポレでは、一晩寝かせたカレーを提供している……そのため、今から明日の分をじっくりコトコト煮込む必要がある。

夏海は一礼すると、ユウスケの腕を引っ張り、また走り出した。

「ありがとうございます！……行きますよ、ユウスケ!!」

「あだだだだ、夏海ちゃん痛い! 痛いってー!？」

「今度、食べにおいでよ。安くするからねー」

叫ぶユウスケ・笑顔で送り出す五代。

お供を一人引き連れ、次に“彼”の行きそうな場所に向かった。

株式会社・BOARD。

今、ここではATASHIジャーナルによる取材が行われていた……ジャーナリストである羽黒レンは、目の前の相手・剣立カズマと話している。

「……こんなに大きい会社、若い社長一人では大変なのでは？」  
「まあ……そうですね。ですが、優秀な社員のおかげで何とか動かせているというのも事実です」

BOARDは、世界融合後の“大幅修正”で大手産業会社……という扱いに変わった。

元々ブレイドの世界に居た、社長の四条ハジメは……突然の病死とされ、他の部署の代表達は彼を社長代理とした。

他からはよく『傀儡のために置かれた』だの言われていたが、カズマには彼自身を理解してくれる者の仲間がいてくれるため、何とかやっていけている。

ATASHIジャーナルのレンも、この体制について若干批判的な記事を書いていたが、それでもカズマにとっては「他と違って真実も書いてくれるいいジャーナリスト」と評価・信頼していた。

「そうですか。では、次に」

……ドンガラガッシャーン！！

社長室まで聞こえるほど大きな音が、聞こえてきた。  
すると、暫く経ってから騒がしい2つの声が……

「……こらッ！ 会社の設備を壊しやがってっ、弁償しろ！！」

「――げーっ!?だ、大体そっちが勝手に人を泥棒だと勘違いしてモップで殴ろうとしたのが……」

「「……」」

レンとカズマの間に、沈黙が流れ……

2人は同時に、溜め息をついていた。

そして、別室で控えていたカメラマンの辰巳シンジが……申し訳なさそうに、部屋に入ってきていた。

「……失礼します。……あの、……」

「分かっているシンジ、――城戸だろう」

「言わなくていいシンジ、――剣崎さんか」

レンとシンジはそれぞれが記事と写真を担うチーム、シンジとカズマは同年代だけあってか……最初の取材の時点で意気投合したらしい。わざわざ報告してくれたシンジを不憫に思いつつも、レンは状況を尋ねていた。

「で、……今度は何なんだ？」

「僕は一応止めたんですけど、城戸さん……『ちょっとトイレに行くだけ』とか言って待合室を出たんです。そしたら……案の定この部屋の前でウロウロしていたみたいで、それが不審者に思われて……」

「で、剣崎さんは？」

「城戸さんを不審者と勘違いして、モップで殴りかかったんです。……城戸さんは慌てて避けて逃げ出したみたいなんですが、その際、近くに置かれていたBOARD設立記念碑にぶつかって……倒してしまっ……」

事細かに語るシンジ。

それを不審に思ったレンとカズマは、追求する。



「何処で、知ったんだ？」

「あれだけ派手な音や声で騒いでいれば、部屋にいても分かりますよ……」

「で、今パツタリと静かになったんだけど。それは？」

「――最も穏便な方法で沈めました」

シンジは、三脚を二人に見せる。

……明らかに、小さな血痕が残っている……

それを見たレンは頭を押さえ、カズマは胸の近くで十字を切っていた。

「……それは、【穏便】か？」

「アーメン」

「剣崎さんが悶えて、城戸さんが気絶したぐらいです。それにこうでもしないと、止まりませんよ……あの2人」

剣崎と城戸、両方をよく知るシンジが語る。

……というのも、城戸のトラブルメーカーぶりと剣崎の勘違いぶりはATAジャとBOARDそれぞれでも有名なのだ。

二人共、沸点が低い上に悪気はないのだろうがこれでもかというぐらいに次々と波乱を呼ぶ。

むしろ、クビにされない辺り……桃井とカズマの懐の深さが覗える。

――だが今日、二つのトラブルメーカーがようやく対峙し……そして、大惨事を起こしたのだ。

「ああ、それと……こっちはカズマにしか関係ないけど、夏海さんに会ったよ。それとユウスケ」

「え、もしかしてまさか」

「……また、みたい。一応、見ていないって言ったら……今度はスマ

ートブレイン学園に行くってさ」

「高校にいるのかな：ああ、それよりも記念碑か。……ボンドでくつつくと思うか、シンジ？」

「やってみなよ。それで修復できたら、俺カズマ称えるよ。うん」  
「よっしゃ。やってみるか」

……ボンドで記念碑を直している場合か、オイ。

……明らかに【会社の不利益になる人材】が、今まさしく大損害を起こしたのに、「クビ」という考えもないのか。

レンはそう思いつつ、本当にボンド（と、セロハンテープ）を持って行ったカズマを見て：本日一番の深い溜め息をついていた。

~~~~~

スマートブレインハイスクール。

世界が融合された後の“修正”で、乾巧は野上良太郎と共にこの高校に通っていた。

更に、スマートブレインハイスクールも、“大幅修正”によって初等・中等・高等に分かれたエスカレーター式の学校【スマートブレイン学園】と名を改めていた。

そしてその余波として、ワタルやアスムもこここの中等部に通っている。

唯一融合以前からこの学校に通っているはずのタクミは、この異変に気付く事もなく――否、気付けないようになっていて――当たり前のこととして、乾や野上と話していた。

「乾先輩、野上先輩」

「どうした」

「えと、…タクミ君…じゃなかった、尾上君。どうしたの？」

野上が言い換えたのには、ワケがある。

乾“巧”と、尾上“タクミ”。

二人共『タクミ』であるため、どうもややこしく感じるのだ。――
――当人達が。

だからこそ、2人がいる時は名字のほうで呼び合っている。

唯一、園田由里だけは…尾上タクミを『タクミ』と呼んでいる。乾と一緒にいても、だ。

乾自身も由里とタクミの関係を知っているため、気には止めなかった。

――というより、由里は確実に乾の事を『乾先輩』と呼ぶので、それで違いはつくのだが。

野上もまた、タクミがいる・いないに関わらず乾の事を『巧』と呼んでいる。時々、尾上のほうも名前で呼んでしまうらしいが…

「――実はちょっと、さっき光写真館の人に会って…また、“あの人”がふらっといなくなったみたいですよ」

「またか。そういえば、この間はうちで何故か写真を撮っていたな…」

「そうだね…」

「だけど、――あそこのコーヒーって結構おいしいよな」

「うん…お菓子も、いいよね」

写真館ではあるようだが、光写真館は：乾達にとっては『タダでコーヒーやお菓子を提供してくれる休憩所』のように思われていた。実際、栄次郎は客人にコーヒーに手作りお菓子を振舞う。だからこそ、殆どの人間は“喫茶店”としか認識していないのだ：勿論、シンジやタクミのようにカメラ関係の仕事屋部活をしている者はちゃんと“今時珍しい写真館”と認識していたようだが。タクミは夏海の気苦労に同情しつつ、苦笑い気味に言った。

「（：なんか、可哀相だ：）……え、えっと、：見つけたらすぐに連絡してくれ、と言って去っていききました」

「そうか。だけど、俺達にはどうでもいいな」

「そうだね：ところで、またバイト？」

「……ああ。尾上も確か、バイトだろ」

「はあ：」

ワタルとアスムは、紅渡や日高仁志と共に歩いていた。

“修正”により、紅渡は中等部の音楽教師兼バイオリン職人・日高仁志（愛称…ヒビキ）は中等部の体育教師になっている。すると：

ユウスケと夏海が、走りながらやって来た。

「――ワタル、アスム君！」

「渡さん、ヒビキさん！」

「ユウスケ？」

「どうしたんですか？」

「：まさか、また：」

「かもなあ」

四人は、それぞれ反応を返す。

そして夏海は、息を切らせながら訊ねていた。

「“彼”、来ていませんか!？」

「「やっぱり」」

「：残念ですが、僕達も見えてませんよ」

「ああ。しかし：大変だねえ」

ヒビキはそう言いながら、――夏海に付き合わされているユウスケを見る。

ユウスケはコクコクと頷き、だが、夏海に睨まれすぐに自粛した。

「もう、一体何処に行っただんでしょう…」

「可能性としてありえそうなのは、レストラン【AGITΩ】か：日本料理亭【天道】では？」

「ワタル：それは多分ないです。“あの人”、お金持っていないじゃないですか」

「おでん屋の【天堂】、……大穴すぎますね」

「一番の大穴は、警察署とかじゃないか？」

彼らの話を聞き、夏海は一礼すると：

ユウスケを強引に引っ張って、また走り出していた。

そんな彼らの背中を身ながら、ワタルは手痛い一言を呟いていた。

「――ユウスケ、仕事よくクビになりませんね」

「……うーん、五代さん：人がいいですから」

「そこが不思議ですよね」

「だなあ」

〃
〃
〃

ショウイチとソウジは、不運にも…【もう一人の“翔一と総司”】の対決に巻き込まれていた。

理由は簡単。

天道が、津上に魚料理対決を申し込んできたのだ。

というのも、【AGITΩ】は洋風・【天道】は和風のジャンルで人気の店。

…天道は負けず嫌いだ。

とりあえず彼はどちらの料理の腕が一番なのか、正々堂々と勝負を仕掛けてきた。

勿論、お人よしの津上はそれを快く承諾。

巻き込まれたのは、昼食をおでん屋の方の【天堂屋】で済ませようとしたショウイチと…大根の買い出しに行っていたソウジだったというわけだ。

「――なあ、何故俺はここにいる？」

「生きているからここにいる」

「…なぜ俺はあの2人に付き合わなければいけない？」

「運命という糸が引き寄せた結果だ、諦めろ」

「…殴っていいか」

「正当防衛でカウンターキックも仕掛けられるぞ？」

漫才をする2人。

しかし、勝負をしている側は…至って真剣。

天道は得意のサバ味噌を作り、津上はムニエルの具を盛り付けている。

「まあ、食費代が浮いていいと思うんだな」

「俺はいいんだが…俺が食わない分、お前の店の売り上げが減るわけだぞ。そこはどうなんだ、オイ」

「——シヨウイチさあああん！ソージさーん！！」

「——津上さん、天道さん！」

ここにも、ユウスケと夏海らが乱入してくる。

丁度二人共、料理が終わったらしく…皿をテーブルに置きながら、夏海達と話していた。

「いいところに来たな。お前達も、食べていけ」

「あ、お代はいらないですよ」

「いいんですか！？やったー、実は昼食まだだったんだよなー♪」

「……それより、“彼”を見ていませんか？」

サバ味噌に箸を入れるユウスケをよそに、夏海が尋ねる。

それを聞いたWシヨウイチ・Wソウジは…

漢字側は首を横に振り、シヨウイチは魚のムニエルを食べているので無反応、ソウジだけMV箸を取り出しながら告げた。

「悪いが、見ていない」

「ごめんなさい。俺も、見ていないんですよ」

「……」

「あ、そういえば。——買い出しの途中で、それっぽい人物を見

た気がするな」

「どこですか!？」

ようやく見つけた手掛かり。

夏海は食い入るようにソウジの所に行くと、彼は素面で

「…河川敷の所だ」

と、答えていた。

夏海は一礼すると、サバ味噌を食べているユウスケを放置して河川敷まで走っていった。

「ありがとうございます! それでは!！」

「達者でな」

「…うわーっ、おいしいなあ! 流石天道さん!!」

「フッ、」

「こっちはなかなかいけるな」

「ありがとうございます」

…何故こうも、マイペース揃いなのだろうか。

むしろ、『しょういち』と『そうじ』の名を冠する者は総てマイペースになる宿命なのか。

後、ついでに『ゆうすけ』。

〃
〃
〃

“彼”は、河川敷で…ごろんと横になっていた。
そんな“彼”の元に、一人の男がやってくる。

海東大樹。

彼は茶化すように、“彼”に突っかかる。

「やあ、こんな所で油を売っているのかい？——士」
「お前か…」

彼…：士は、むくりと起き上がる。

そしてニヤニヤとする海東を訝しそうに見ながら、皮肉を返す。

「お前もブラブラしていいのか」
「僕はいいんだよ。それよりも、サボっているとまたナツメロンがやってくるよ」

「ナツミカンだ。…ショウイチはキンカンとかザボンとか煩いが」
「どっちでもいいだろう。それよりも…：これは、後遺症なのかな」

海東が、呟く。

その言葉の意味が分かっているのか、士も、自分の首に掛けているカメラに視線を移す…

実は、彼らにはライダーとしての戦いの記憶が、消えずに残っていたのだ。

考えられる原因は、一つ。

ディケイドライダー、並びにディエンドライダーの影響だろう。それを象徴するかのように、あの戦いの後…あたかも存在していなかったかのようにユウスケのアークルや、カズマのブレイバツクルなどが消えたというのに……

二つのドライバーだけは、残……残されていた。

「あれから一年経ったというのに、これまでの戦いの記憶が消えない。それどころか、昨日のことに…鮮明に思い出される始末さ」

「ああ、そうだろうな。——だが、記憶とドライバーが残されているのには、必ずしも理由があるというわけだ」

「……イレギュラーの、最期の言葉か」

『……忘れるな…ライダーいる限り、俺は消えない……俺はまた、いつか…再び舞い戻る………!』

“この世界”以外にも…無数に分かれる世界、例えばアマゾンやBLACK・RXのような“この世界”とは元から別物の世界には今だライダーが存在する。

そしてライダーが存在するということは、怪人も存在するということ。

…イレギュラーは、倒されてきた怪人の集合体…

“この世界”には元々怪人がいなかったことを踏まえると、世界を越えて集まってきた事になるのだろう。

最も大ショッカー自体、その【別世界】からやって来た残党の一部

が集まってできた組織……だと海東は士に語っていた。

「いずれにせよ、——いつかまた…始まるのか。奴との戦いが」
「かもしれないね。それが、どのぐらい先の未来なのか分からないけど…」

「大体分かった。……【その時】まで、後生大事に持っておけという事か」

「だろうね」

そう話していると…

「——士君ッ！」

夏海が、息を切らせながらやってくる。

そして…

士と海東の2人に、同時に【笑いのツボ】を発動させた。
勿論、それを受けた二人は途端に大笑い。

「だはははははっ!?…お、おい、ナツミカン…!ふははは」

「あははははは!…ひ、ひどい…酷すぎる…ナツメロン…ははは」

「居候のクセにサボっているからです!海東さんに関しては、コーヒーやお菓子の代金…踏み倒す気でしよう!?’」

「さ、サボリじゃな…あはははは」

「つ…士と一緒にしないでくれ…あはははは」

大笑いしている2人。

だが、夏海は「問答無用」と言うかのように二人を引きずり始めた。
向かう場所は、勿論……光写真館だ。

「言い訳は聞きません。さあ!笑っていないで、帰りますよ!」

「あっはっは…笑わせたのは、お前だろ…：ははは」
「うはははは…そんな調子じゃ、婚期を逃すよナツメロン…：あはは」

彼らは、修復された世界の中で…新しい一步を送っている。

9つの世界は消滅した。融合という、形を以って。
しかし、消滅したライダー達は復活した。

更に元のあるべき形の世界に戻った事で…自分達の『ライダーとしての力と記憶』を失った。

それだけではなく、多くのものを失い…
だがそれでも、彼らは一つとなった“この世界”で生きている。
：いずれまた来るであろう、【存在】を忘れて…

果たして、これがハッピーエンドなのか。バッドエンドなのか。
それを判断できるのは…

『ほう、興味深い事例だ』

『どうしたんだよ、フリリップ』

『聞いてくれ翔太郎。【地球の本棚】で検索をしたら…こことは違う、“別の世界”についての文献が見つかったんだ。話すと長くなるけどね…』

『…あまり長くなるなら、キリのいいところで切れよ』

分岐された未来の結末を知った、者のみだ。

）F i n（

後書（後書き）

ハッピーエンドか、バッドエンドか。

判断は読み手の皆様に任せますよー、なラスト。

それを象徴するかのように、フィリップ君としょーたろー君が友情出演↑

何やってんだあんたら！

ちなみに翔太郎とフィリップにはちよつとした裏話があるので、それは後日掲載予定のモノで確認してくださいね。

個人的には、……バッドエンドですかね。

すべての敵は倒した。

だけど、多くの犠牲が出た。

更にその【犠牲】の上に成り立つ生、だと言う認識も忘れ：

それに『まだ戦いは終わっていない』

まあ、ここらへんの判断は本当に皆様に委ねます。

とりあえず、これは31話の最終回で：ディケイドがディエンドに撃たれた後、という分岐未来のお話。

とりあえず、この地点で

・1話にループ

・冬映画に突入

に加え、「どちらにもならず続行」という展開になりました。

他の皆様の小説の事も考えると、かなりの分岐数になりそうな気が

しなくも：

ディケイドって、意外とああいふ設定＋最終話ということで様々な可能性やライダー以外の他作品への堂々たる侵入……ではなくクロスもできるんじゃないかね。

他もディケイド放送前からそんな感じだよ、って感じですがWW

本編はこれでお終いです。

後は、8／7の後日談的なものが投稿されて終了…です。

裏話（前書き）

読んで字の如く、裏話。

展開の都合上ボツにされた話とかを…

裏話

ハルル「さて、ここでは説明補足みたいなものをしていききたいと思っています」

士「台無し感炸裂だな」

海東「そうだね」

ハルル「とりあえず、本編の雰囲気壊すな！と思う方は見ないほうがいいです。ハイ」

Case 1. ソウジを査察官ダスマダーにするつもりだった？

カズマ「うええーいつ!?!」

シンジ「ちょ、また懐かしいキャラを…」

ショウイチ「何故そうだったし」

ハルル「タイムベント炸裂させたシンジが異端↓CUの世界から抜け出せなくなったソウジも異端では?という発想から来ました」

アスム「しかし、選択が渋いですねえ…」

ハルル「ゾル大佐は映画で鳴滝が取ったから、【悪役キャラ】で【謎の多いキャラ】となったらRXのダスマダーがいた、と」

ショウイチ「ダスマダーにさせてどうする気だったんだ?」

ハルル「城戸と既にコンタクトを取っていて、この時考えていた大ショッカーよりも上の敵組織に侵入している役割」

カズマ「そっちのほうがいいんじゃない?」

ハルル「ちなみに、その際城戸はショッカー戦闘員だった」

シンジ「は」

ハルル「だから、シンジの体のままで城戸がああ服を…」

シンジ「ぎゃーッ! 却下、そんなの却下ー!!」

アスム「いや、却下されてますから」

ソウジ「ゾル大佐が良かったな」

ショウイチ「やめい!」

アスム「それに、ゾル大佐は狼男です」

ワタル「そうですよ。やるなら、タクミさん以外に適任はいません!」

タクミ「…僕も遠慮するけどね」

Case 2. 本当はシンジがユウスケを復活させて…?

ハルル「本来なら、『ディケイドとディエンドは復活対象にならない↓ドライバーの旅の記憶では復活に至らない↓彼らの復活のためには、彼らを知る人物でないといけない』ということになる予定でした」

夏海「はあ」

ハルル「で、『そのためには一番知っているユウスケが必要↓シンジは辛うじてユウスケを知っているから復活できる↓ユウスケ復活↓彼が士と海東を生き返らせる』ってする予定でした」

士「で?」

ハルル「…それが、何故か『ディケイドじゃなくてシンジの記憶で復活↓ディケイドでやる方法以上にアーカイブに大きな負担が掛か

るから、一時的に機能停止する』とかなって、結果的に收拾が付かなくなった」

ユウスケ「おーいッ!？」

士「これが、いわゆる『どうしてこうなった』…か」

海東「駄目だこの人早く何とかしないと」

ハルル「だって、それ書いていた時めっちゃくちや頭眠かったし!」

Case 3. 本当はバケガニ乱入予定だった

ハルル「これは明らかにショウイチネタ」

ショウイチ「俺かい!」

アスム「なんでバケガニなんですか…」

ハルル「いや、本当は『オールモンスター』って言ってるけど弱くね

? ↓実は呼び出した怪人の数ほど劣化↓その分一つになると最悪↓

だけどカブトが一体倒したから勝機ができた』っていう」

カズマ「うわー、そのネタはやったほうがよかったんじゃない」

ハルル「でも『管理者達の強力を経て強化体』とか『バレ画像の構

図をやりたかった』ってのが、ね。…後は、次に繋げにくかった」

海東「さてと。ここで、そのシーンをちよつと流そうか」

『Attack Ride REPLAY!』

〃
〃
〃

「やるな、海東」

「12ループ前で、ちよつとした手違いから君と僕が争う結果にな

ってね。あいつの行動は…その際、君が使った戦法さ」

「くっ…！先に他のライダー共を片付けるか」

『Kaijin Ride BAKEGANI!』

そのカードが装填された瞬間、クウガ達の相手していた怪人達が一斉に収束される。

そして、彼らを糧に生み出されたのは…

巨大な蟹の怪物、バケガニ。

普通よりかなり大きいバケガニに、響鬼が叫ぶ。

「あ、あれがバケガニ！？前のより、遥かに大きい…」

「怪人全員分、だけありますね…」

「関係ないぜ！おらあああ！！」

電王がバケガニに挑む。

そして、デングッシャーをその脚に叩き付けるが…

ガン！

軽く弾き飛ばされ、地面に倒れこんでしまう。

「か、硬てえぞ！？あの蟹野郎！」

「あんな固い奴に、どうやって勝てって言うんだー！」

驚く電王、叫ぶブレイド…

彼らの気持ちはよく分かったのか、アギト達も同意していた。だが、クウガはあることに気が付いた。

「ま、待て。あれを見ろ！」

バケガニの一部に、ヒビが入っている。

さっきの電王の攻撃か？と思うものもいたが…あそこは脚。
ヒビがあるのは、背中側だ。
誰もが戸惑っていると、龍騎が呟く。

「……アレが集められていった怪人でできている、って言うことは
…一体でも怪人が欠けていたら、それは【不完全】なんじゃないか
な…？」

「「！」「」」

「そうか、俺が倒したフィロキセラワームの分か…」

「だったら…あそこを一点集中すれば、倒せるかもしれない！」

龍騎の意見は最もだ。

あのバケガニは…先程カブトが倒した怪人一体分、抜け落ちている
状態。

そこを崩せば。

それを聞いたディエンドは、かなりの枚数のカードを取り出す。

まずは、響鬼をFFRさせる。

「少年君、痛みは一瞬だ」

『Final Form Ride H—H—H—H I B I K I！』

「うわっ！？」

響鬼は、ヒビキアカネタカに変形する。

更にそこから、FARによるヒビキオンゲキコへと変形…そのまま、
バケガニの欠けている部分に張り付いた。

その際、音撃棒・烈火はクウガの手に渡る。

『Final Attack Ride H—H—H—H I B I K
I！』

「小野寺君、使いたまえ！僕は、あっちに集中したいからね」

「海東！」

「さてと。他のライダー達も、やってもらうよ！」

『Attack Ride REPPUU!』

『Attack Ride RETUZAN!』

『Attack Ride RESUI!』

『Attack Ride RETTOU!』

『Attack Ride RETUBAN!』

『Attack Ride REKKUU!』

『Attack Ride RESSETU!』

音撃管・烈風は龍騎、音撃弦・烈斬はブレイド、音撃棒・烈翠は電王、音撃金棒・烈凍はカブト、音撃震張・烈盤はアギト、音撃吹道・烈空はキバ、音撃三角・烈節はファイズに渡される。

アギトは自分に渡された烈盤を凝視していたが、横のカブトが烈凍を振り始めたためそれを止めていた。

「…嫌に手に馴染むんだが」

「ふん、せいっ」

「…：振り回すな！俺に当たる、やるなら蟹にしろ！！」

「行くぞ、皆！」

二人の漫才に付き合っていていらなくなったのか、そもそも時間がないためか、クウガが先導する。

（
）

タクミ「なんでトライアングル!?」

ワタル「烈斬が良かったです！」

カズマ「何故そうなったし！」

シンジ「ヘタレの武器はヘタレに渡せ」

ハルル「お前らは渡された武器しかツッコミ入れないのか！あと、本当は烈風はカズマの予定だったけどブレイドはギターのほうが似合ったからそうなった！ちなみにシンジの初期がトライアングル！

！武器決まっていたのはショウイチとソウジだけ！！！」

ショウイチ「Σその案ボツになってよかったッ！！」

ユウスケ「っていうか、……そのほうが個人的には良かった気がする」

士「今更だ」

夏海「はい」

タクミ「っていうか、あれ、もしかして……」

士「どうした」

タクミ「……いえ、あの、……スーパークライス要塞にあったヒビって、フィロキセラの分なのかなと思ったけど違いますよね……」

ハルル「半分間違い。……文中の通り、ダメージがまだ残っているからってのが理由なんだけど……それはボツにされたバケガニの事を踏襲して作られた」

ユウスケ「おー、成程！」

Case 4. 本当は皆……

ハルル「『ディケイドと関わった地点で異端↓タイムラグが若干起きつつも復活』って予定だった」

カズマ「……そろそろ怒っていいかな」

シンジ「踏み飛ばせ」

ユウスケ「その際、復活時間は？」

ハルル「再生が終わった順じゃない？とりあえず、ファイズとかブレイドとか……」

タクミ「クウガ・アギトが一番時間掛かりそうですね」

Case 5. 赤目アルティVS黒目アルティをやる予定はなかった

ユウスケ「えええええーッ!？」

カズマ「ちょ!何で!？」

ハルル「本来なら、イレギュラーがユウスケの体に乗っ取った状態で最終決戦の予定だったんです」

士「は？」

ハルル「で、その地点でシンジの意識は目覚めていない予定でした」
シンジ「おい」

ソウジ「大体分かった。――龍騎は城戸操作、クウガは五代加入で済ませる気だったな」

ハルル「イエス！」

ユウスケ「……良かった。その案、ボツになってよかった:!!」

シンジ「最後の最後まで、体操られたままとかすっごい嫌なんですけど」

ショウイチ（でもお前ら…個人では本編で目立ってないのに、肉体では【貢献】という名の凄い恩恵を貰っていたぞ）

ワタル「それだったら、ユウスケの体終わりますね」

ユウスケ「Σひどっ!？」

ハルル「大丈夫。もう最終回の地点で死んでいる↓だけど肉体だけは残っているという状態だったんだから、元から終わってる」

ユウスケ「フォローにもなっていないし！」

海東「じゃあ、妖怪タツミシンジの肉体も……ゴクリ」

士「：城戸に酷使されて、結果的に……」

夏海「シンジさん、：脳ミソ的な意味でご臨終です」

シンジ「暴れるよ」↑カードデッキ装備（ただし王蛇）

ショウイチ「やめい！」

Case 6. ソウジとショウイチの漫才

ハルル「Case 2に続くネタなんですけど、その際『ユウスケが他のライダーも復活させる』って感じだったんですね。文章残してないけど」

ユウスケ「うわ、そりゃあボツにしたくなるぐらいワケ分からない」
ハルル「その際、こんな会話をさせる予定でした」

海東「じゃあもう一回」

『Attack Ride REPLAY!』

（（（

※カブト復活の経緯は、ユウスケがカブトの存在を認識していたから……となっています

ユウスケ「でも俺、この人知らないんだけど……」

ソウジ「おばあちゃんは言っていた。男なら、細かいことは気にするなと」

ショウイチ「いや、気にしろよ…」

〃〃〃

士「……何でお前達は、二人揃うと漫才するんだ？」

夏海「OK案でもそうでしたよね」

ショウイチ「知るか！」

アスム「でも、意外とカズマさんとシンジさんはディケブラ並みのボケをしませんでしたね」

タクミ「…“後書”では、若干そんなノリがあっただけだね」

ソウジ「…」

士「おーい、【仮面ライダーディケイド〜スマブラの世界〜】が誇る最強の行動力と最強の発想力。どうした？」

ソウジ「ショウイチがダスマダーをやって、俺がゾル大佐をすれば万事解決！」

カズマ「何処からそんな纏めになったんだ!？」

シンジ「あなたの頭蓋骨を割って頭の中を調べてみたいよ!」

ソウジ「で、その際シンジがヨロイ元帥でカズマが蜂女ならぬ蜂男」シンジ・カズマ「Σ嫌すぎるーッ!!」

ワタル「僕はピンヒールを履いて雑魚ショッカーを踏みつけにする役がいいです」

アスム「僕は師匠のような怪盗になります!」

タクミ「こ、この子達の未来が心配になってきた」

キバット『Yes…ワタルう、お前すっかり腹黒くなっちゃって…』

…』

Case 7. シンジが「僕」の理由

士「これ結構気になった」

カズマ「本編でも“俺”か“僕”か分からないよな
シンジ「をい」

ハルル「んー、原作に忠実に行こうとした結果、そうなったという
か。病んでなかったから“僕”だったというか」

ユウスケ「えええ…」

ハルル「あと、城戸が『俺』って言ってるので…その対比に使って
ます」

夏海「あ、シンジさんと城戸さんを使い分けてるんですか」

カズマ「まあ、一応同じ体だしなあ」

カズマ「でもさー、それって一人称が違うからできることだろ？ W
アギトとか、W響鬼みたいに」

シンジ「まあ、確かに」

タクミ「ファイズもですよ」

カズマ「だけど、他はどうしようもないよな。皆『俺』だし」

士「それだったら、『オレ』とかで使い分けられるだろ」

ハルル「変換めんどい」

ユウスケ「おい！」

Case 8. 世界は元々一つだったと思った理由

ハルル「おじいちゃんの『これが本当の世界』ってセリフで、おじいちゃんの目にはつきりと見える範囲での変化があったと推測・元々世界は一つで、おじいちゃんの目の前には本来あるはずのない」
今まで旅した世界の姿が融合した光景【が見えていたのではないかと】

ワタル「成程…」

Case 9. 本当はアルティ対決で五代にも人体発火をする予定だった

士「マジか」

ハルル「マジだ」

海東「人体発火のダメージで相打ち、ってさせる予定だったんだね」
ワタル「どうしてそうならなかったんですか」
ハルル「…なんでだろう…」

海東「しかし、よくよく考えると…生存者がナツメロンとその祖父だけって感じだよな」

夏海「どうしてですか？」

士「シンジも一応生きてはいるだろう」

海東「確かに体は残っているけど、意識不明…良くて植物人間、下手すれば【脳死】とかそう言う可能性がないとも……」

アスム「それ以前に、ソウジさんは姿が見えていないだけで普通に生きていそうですね」

士「ソウジだからな！」

ショウイチ「ああ。何があっても、あいっだけは鳴滝の如く生き残る…！」

ソウジ「いい加減怒るぞ？」↑烈凍振り回し

Case 10. 相打ち多すぎる

カズマ「紅渡VSキバーラ、チーズVS未来チーズ、で…ボツ案のWアルティも含めると…：…うっわ！相打ち多い…！」

ハルル「都合上仕方ない展開」

ワタル「どうしても紅氏は消したかったんですか」

ハルル「恨みはないんだよ、渡には」

ソウジ「逆に恨みがあつたのは？」

ハルル「鳴滝」

タクミ「ですよー」

Case 11. 本当ならウイングランサーで…

タクミ「ジェットスライガー大破させる予定だったんですか！？」

ハルル「おう」

カズマ「どうやって！？」

ハルル「そりゃあ、城戸だから、発想の斜め上を言って…：『投げたー！』」

ショウイチ「投げるなッ！？」

ハルル「それに最初は、ダークウイングに乗ってやってくる予定だ

った。でも、ス〇パーで龍騎見ててどう考えても人を3人も乗せられる大きさじゃなかった事に気付いて、サバイブ体に変形させた結果、変えた」

カズマ「ありがとうダークウイング！無駄に小型じゃなかった！！」
タクミ「ギャグも大概にしてくださいよね…」

Case 12. 桜子さんを孕ませる気は無かった

士「…感動が台無しだな」

ハルル「胎児ごと殺される、ってグロもいいところじゃね？とか思ってたけど…」

カズマ「思ったけど？」

ハルル「鬼畜チーズを書きたかった」

士「おい！」

カズマ「ちーじゅ……（引）」

士「引くな！コラ、おいっ！！」

夏海「グロ大好きですね」

ハルル「本当は嫌いなんだぜ☆」

ユウスケ「じゃあ何故書いたし！」

ハルル「…俺の中の聖なる泉が枯れ果てた」

海東「そもそも、なんで僕はあんな事になったのかな」

ハルル「お前だけ勝手に電王に出た、門矢士・光夏海・小野寺ユウスケの恨み♪」

海東「な、」

ハルル「——ではなくて、展開上しようがないでしょ。あんな暴走クウガVSディエンドを見た瞬間から、【海東が士を庇って死ぬ】

という構図が既にできていたんだから」

海東「やり方はどうあれ、……『士を庇って』という部分だけは褒めたい」

ユウスケ「Σ褒めるのかよッ!？」

ハルル「孕ませネタはまだあったんだけど、まあこれは追々」
シンジ「不安しかないんだけど」

Case 13・覚えていない割には意外とカズマのこと覚えてたな

シンジ「ホント、忘れてる筈なのにすっごい記憶力だったね」

ワタル「言い方はあれですけど」

アスム「覚え方もですよ」

カズマ「ちーじゅ…（悲涙）」

士「泣くな!」

ソウジ「しかも、微妙な所を…なあ」

ハルル「カズマとは（今回の周期で）かなり仲がよかったですから。記憶から抹消されつつあっても、ある程度は覚えているでしょうし」

士「しかし、何度もループしていたということは…」

夏海「?」

士「ひょっとしたら、……まあティルズオブシンフォニアの好感度システム風に言うのなら…好感度一位がショウイチで、ライダー大戦の世界でショウイチと再会するとか」

海東「18, 22, 46ループ前だねえ」

ユウスケ「Σマジであつたんだ!？」

士「100%ありえないと信じたいが、ソウジとか…」

海東「いいや士。彼とは：15，68，108ループ目で」

アスム「相手がクロックアップしていたのに、よく好感度高くできましたね!？」

ワタル「正直、無理ゲーですよ!？」

士「……ユウスケだけって言う可能性は？」

海東「それは555ループ目にあったよ」

ユウスケ「あるんだ!？でも、その時の士って……ツン全開だったとか?」

海東「いいや。その周期に限っては、一番仲良くしていたのが尾上タクミだったんだけど……オルフェノクの寿命が来て……というわけで」

タクミ「何が『というわけで』なんですかッ!？」

士「カズマがアンデッドになった周期とかあるか!？」

カズマ「焼きチーズにしているか、士」

海東「193ループ目かな」

カズマ「Σあるのかよっ!？」

夏海「シンジさんがもう一人の自分に会う周期がありました!？」

ソウジ「それは何処の劇場版龍騎だ？」

海東「それは：753ループ目にあったよ。そうそう、鳴滝さんはこのループのリュウガを味方に引き込んだみたいでね」

士「ってことは、ファイズの世界で……俺が消したリュウガは……」

シンジ「……おいナマコ、鳴滝がボコボコにされていた周期とかあったか」↑黒覚醒

海東「うーん、あ、……846ループ目で鳴滝さんはCUの世界に閉じ込められる前のカブトに『ディケイドは悪魔だ』って吹聴しようとしたんだけど、……無視されてスルーされた挙句『おばあちゃん』は言っていた。根も葉もない話を簡単に信じるなと』と一蹴した後、

尚もしつこかった鳴滝さんに笑顔で上段蹴りを決めたことがあったらしくてね。それ以来、カブトの世界でカブトに擦り込みをするかと自体をやめたんだ」

士「…ソウジ攻略自体が無理ゲーに近いよな」

夏海「でも士君、その無理ゲーを15, 68, 108の三回もクリアしてますよね…」

ショウイチ「誰が一番多かったんだ？」

海東「同年代の辰巳シンジと剣立カズマが凄い比率を誇っていたよ…ついでに尾上タクミも。ああ、でもキバの王子はどのループにおいても確実に小野寺君とくっついていたからねえ」

ソウジ「つまり、士にツンでユウスケにデレ！」

ショウイチ「正解だが無理に最近覚えた言葉を使うな！」

ワタル・アスム（そういうあなたはツンデレ激しいですよ）

士「個人的質問」

海東「なんだい？」

士「今回のループは、俺がカズマと一番絡んでいたから剣崎が出てきた…ということか？」

海東「違うな。ライダー大戦の世界で、剣崎一真は常に絡んできていた。時々、天道総司とか乾巧も来ていたけどね」

ユウスケ「俺も個人的質問！」

海東「なんだい？」

ユウスケ「ワタルが毎回俺と好感度一位ってことは、ライダー大戦の世界で常にワタルも…」

海東「絡んできたよ。ソーンファンガイアの件もあったしね」

夏海「海東さんはいつもアスム君と仲良くしていたんですか？」

海東「そこは、士の好感度自体によるな。20, 66, 123, 455ループ目は少年君が一位だったし」

アスム「ワタルと士さんは好感度一位にはならないんですね？」

海東「なることはなるけど、それより小野寺君最優先だったんじゃない？」

ないかな？」

タクミ「あの、絶叫魔王・ショウイチさんVS天然ドSソウジさんという対決とかがありましたか!？」

ショウイチ「おいおいおいおいっ!？」

海東「あったよ」

ユウスケ「Σ……」

夏海「世界滅びましたね」

士「いやっ!…ワタルとカズマという、聞かずん坊よりは人の話を聞いてくれそうだ…俺はそう思っている…」

ショウイチ「その割には、俺らから目を反らしているようだが？」

ソウジ「ライダーキックをしたら口を割るだろうか」

ショウイチ「捕縛は任せろ。無駄に超能力を持つてはいない」

カズマ（むしろ、この2人が手を組んだらそれだけでヤバイ気が…）

士「ということは、下手をしたらシンジVSワタルの人外決定戦!？」

シンジ「……そこ、普通タクミ君じゃないのかなあ？」

アスム（個人的には、ドッジ&剣崎さんと城戸さんの仲の悪さ繋がりですんじさんVSカズマさんの破壊神対決があるのかと思うと寒気が）

海東「——少年君、それは10ループ目に起こった悲劇だ。あと、剣崎一真と城戸真司は意見が合わないだけで性質的にはほぼ一緒だ」
アスム「Σあったんですかっ!?! いや、それ以前に…師匠! 僕の心の中を読みました!？」

Case14・キーパーソンがS・Tなんだが

ハルル「ごめんなさい。個人的趣向＋本編で目立たなかったんだからこれぐらいいいだろうっていう…でも中身は城戸真司！」
士「おい！」

海東「むしろ、城戸真司優先だったね」

ハルル「城戸は愛すべき馬鹿」

夏海「褒めてないですね、それ」

ハルル「それが褒め言葉！」

城戸「違うからッ!!」

Case 15. シンジの事故の原因は誰だ

ハルル「これはCase 1に繋がる。カブトの世界と龍騎の世界がライダー大戦やってて、避難している最中にZECTの攻撃を受けて意識不明になった…って設定だった。うん、ソウジがダスマダーやってれば」

ソウジ「ゾル大佐なら」

ショウイチ「やるな！」

カズマ「でも、シンジってカードデッキ…」

ハルル「カードデッキについては…借りパク状態説と、返還説があるけど…前者の場合はレン達の前でやるとややこしい事になるからやらなかったから、後者はデッキ返してたから変身できないで避難していた…という」

カズマ「まず、その二つの説が上がっている場所って…」

ショウイチ「…某大型掲示板じゃないか…？」

Case 16. 翔太郎とフィリップが：

ハルル「本当は混ざる予定だったんですよ」

ショウイチ「その2人の必要性について、少し話し合うか」

ソウジ「だが、ラストでもう出ただろう？」

ハルル「それとは違う形で出したかったんですよ。例えば…」

・桜子さんの子供の名前候補に、「翔太郎」「来人」

・最終的に融合した世界は「Wの世界」となり、翔太郎達の戦いが始まる

ハルル「……みたいな？」

士「桜子の子供の名前について、小1時間話し合おうか！」

ショウイチ「俺か!？」

シンジ「違います」

ソウジ「：明らかに、2番目をする気満々だったんだな…」

ハルル「でも、真剣に1分考えて『来人は元より、翔太郎はやめとか』ってなった」

アスム「その1分間のシンキングタイムに感謝します」

Case 17. それ以前にダブル多かったな

タクミ「意外と、ダブル出てましたよねー」

ハルル「ルナトリガーになったのと、ラストか」

シンジ「Case16の事も踏まえるとね…」

ハルル「翔太郎好きだし」

カズマ「理由は？」

ハルル「あのアホの子&不憫ぶりが可愛い」

士「……しょーたるー！ここにボイルキャベツの根源がー！！」

Case18. 本当は秋山蓮も出したかった

ハルル「でも、羽黒さんが同時に担えばいいと思ってしまった」

シンジ「おいっ！」

ワタル「他にはいないんですか？」

ハルル「いなかったなあ…そもそも、全作品見ているわけじゃないし、記憶も曖昧だし」

士「確かに」

ハルル「それに、この状況下で愛理さんや橘さんなんて…今更出せたか！？出していたら、脳内パンク起こすよ！！？」

ユウスケ「だから割り切った、ってことか…」

海東「ダブルは出したくせにね」

Case19. 所々ギャグ

ハルル「……真剣な話ばかりだと、頭疲れるんですよ」

ユウスケ「分かる、その気持ち…すっごく分かる！」

士「そういうものなのか？」

ワタル「僕に聞かないでくださいよ」

Case 20. そもそもラストは…

ハルル「ショウイチさんと八代さんが結婚式挙げることになったり、ソウジがショウイチの同僚になっていたりするはずだったんですね」

アスム「ソウジさんに関してもですが、ショウイチさんもネタに困らないんですね」

ハルル「でも、無理かなーと諦めた」

タクミ「諦めたんだ…」

ハルル「次に考えたのは、夏海と士が既に結婚していて…夏海ちゃんのお腹の中に士の子供が」

シンジ「またそれか」

カズマ「何故そうなる」

ハルル「…そう思ったからやめたんだよ！で、最終的には士と海東が記憶もドライバーも未だに持っている微妙な鬱END」

海東「…何で芦河ショウイチ結婚ネタをしなかったんだ！」

士「正直、当事者の俺達にとってはありがた迷惑だ！」

ハルル「結婚式ネタだったら、五代達も皆そこで顔合わせってなる予定だった」

ユウスケ「皆、一体どういう関連で来たんだよ…津上さんはともかく(?)」

ハルル「となったので、やめました」

夏海「それが理由だったんですか!?!」

海東「…とりあえず、皆揃って写真撮影って事にはならなかったの

かい」

ハルル「無理。ディケブラに期待しろ」

海東「理不尽すぎる！」

ユウスケ「でもラストだけ見ると、（一部を除けば）ちょっと明るいよな」

士「ああ。ユウスケ誘拐だの、剣崎&城戸の記念碑破壊だの、シンジの三脚鉄槌だの、カズマのおバカ発想だの、写真館として扱われない写真館だの、料理対決だの、ボケと突っ込みの漫才劇場をやっているアギトとカブト（※not津上&天道）だの、笑いのツボだの…」

夏海「とにかく、【Kamen Rider DECADE】分岐された未来」はこれで終幕！」

ユウスケ「ご視聴、ありがとうございました！」

裏話（後書き）

これedyouやく完結です。

個人的には、不完全燃焼ですけど…

まああってもなくてもいいようなものが揃っていたので↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7429m/>

Kamen Rider DECADE～分岐されし未来～

2010年10月10日20時46分発行